改訂 女子新國文 巻五

375.9
Ha7
資料室

42234
教科書文庫
4
810
42-1927
200030
1907

昭和二年一月十二日
高等女學校國語科用
文部省檢定濟

文學博士 芳賀矢一 編

改訂 女子新國文

五卷

東京
合資會社 冨山房 發行

資料室
3759
Ha7

六　女子服飾の變遷

春日野の春　　高村眞夫筆

広島大学
教
53578
図書

改訂

女子新國文　卷五目次

一　明治天皇の御製……一
二　明治天皇の御製について……四
三　ことばの話（自修文）……佐々醒雪……七
四　白い曙……三木露風……二
五　池野大雅とその妻……本山荻舟……一四
六　女子服飾の變遷……一九
七　仁和寺の僧……吉田兼好……二三
　一　石清水……二三
　二　かなへ……二三
　三　木のぼり……二五
八　舊藩の明君……二六

九　樹下漫筆（自修文）……馬場孤蝶…三三
一〇　新緑の頃……近松秋江…三六
一一　五月の太陽……萬造寺齊…四四
一二　田舍の自然……吉村冬彦…四九
一三　祖先を崇び家名を重んず……五一
一四　國境……河井酔茗…五六
一五　伊勢志摩の海……田山花袋…六三
一六　春の歌、夏の歌……六九
一七　蘇州城内……芥川龍之介…七一
一八　西瓜と蠅……大町桂月…七六
一九　蟻と地上（自修文）……井上康文…七八
二〇　佛法僧……高濱虚子…八四
二一　十訓抄と著聞集……九一

一　都良香……九一
二　能因法師……九三
三　鳥羽僧正……九四
三　夢で出會つた運慶……夏目漱石…九五
三　「日本だ」……島崎藤村…一〇一
四　をみなへし（自修文）……生田春月…一〇七
五　銀砂滿天……河井酔茗…一一三
六　野菊……前田鐵之助…一一五
七　神國の首都……小泉八雲…一一六
八　戸隱登山……荻原井泉水…一二三
九　子等と共に（自修文）……原田讓二…一三四
〇　空行く雁……（異本曾我物語）…一四四
一　陣屋問答その一……森鷗外…一四八

陣屋問答その二……森鷗外…一五五
健康な秋の大地……川路柳虹…一六〇
春の七草と秋の七草（自修文）……一六六
舊都の月……（源平盛衰記）…一六八

改訂

女子新國文　巻五

一　明治天皇の御製

さし昇る朝日の如くさわやかに
もたまほしきは心なりけり

四方の海皆はらからと思ふ世に
など波風のたちさわぐらん

ほどほどに心をつくす國民の
ちからぞやがてわが力なる

おのがじし

おのがじし務ををへし後にこそ
花のかげには立つべかりけれ

おのが身を修むる道は學ばなん
賤がなりはひいとまなくとも

子らはみな軍のにはに出ではてて
おきなやひとり山田もるらん

獨立つ身になりぬともおほしたてし
おやのめぐみをわすれざらなん

たらちね親の心を慰めよ
國につとむる暇ある日は

白つゆの風にこぼるゝ數みえて
あさ日すゞしき竹のした庵

政いでて聽く間はかくばかり
あつき日としも思はざりしを

よりそはんひまはなくとも文机の
上には塵をすゑずもあらなん

凌駕す

神業

(一)藤原家隆。新古今集の撰者。嘉禎三年(一八九七年)歿。年八十。

(二)古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、新勅撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今。

精力絶倫

班に進む

二　明治天皇の御製について

明治天皇の御製が十萬首もおありなさるといふことは、あらゆる點に於て、東西古今の君主を凌駕し給ふ御事績の一つとして、驚歎し奉るより外はない。大天皇のすべての鴻業が神業である如く、これも一つの神業である。古來、最多作の歌人といはれた家隆卿さへ、天皇に比べ奉れば、ものの數でもない。歷代の勅撰二十一代集の歌の數が總數三萬數千首、その幾倍の數を御一人で御作り上げになつたのは、眞に人間業ではない。かばかり多數な御製が、最も多事な明治の御治世に於て、萬機御親裁の餘に成つたことを考へ奉れば、その御精力の絶倫であらせられたこと、いつの世、どこの國にも類例はない。皇威を四方に輝かし、皇國を世界一等國の班にお進めあそばした大業と共に、言の葉の道に於ても、空前の偉績をお示し

語草

になつたことは、億兆の欽仰し奉るところ、千代萬代かけての語草である。

御精力の絶倫にあらせられたことはいふまでもないが、かばかり多數な御作のあつたことは、平素何等の娯樂をも近づけ給はず、酷暑嚴寒の時も、一度として遊幸の仰出もなく、常に宮中におはして、唯一の御慰となされたのが即ち和歌であつたからである。これを思へば、實に恐多いことで、かつまたその神々しい御性格を窺ひ奉ることができる。御製を拜誦し奉るものは、一言一句、これが即ち萬機親裁の餘、御くつろぎあそばされた御日常の御慰安であつたことを拜察しなければならぬ。

風調

日常の御慰安の爲にお詠みあそばされた數々の御詠、その風調は高く、規模は大きく、いかにも萬世一系の帝祚を踐ませ給ふ上御一人の御作と窺はれる。國を思ひ、民を憐ませ給ふ大御心は、常に御

上御一人

製の上にあらはれてゐる。一首の歌が米國大統領ルーズベルト氏を動かして、講和仲裁に盡力させる動機となつたといふ御逸話の如きは、三十一文字の和歌が、千萬の兵馬にもすぐれた力を示したもので、和歌始つて以來未曾有なことである。まして七千萬の國民が日常拜誦して、自然に蒙る偉大な感化に至つては、何等の經典もこれに並ぶものはない。日々の御慰が直ちに國民教化の源泉となる、これほどの貴さが、いつの世、どこの國にあらうか。

明治時代の詔勅は森嚴雄大、永く國史を照らして、後世の國民に聖代を語り、典範を示すのである。しかし、詔勅にはそれぞれの形式があり、聖意を承けて起草する人のあることも明白である。御製は直ちに大御心から發したもので、これを拜誦するものは、即ち直接に玉の御聲を拜聽するのである。草莽の微臣まで、日々玉の御聲を拜聽する光榮を有するのは、實にわが國民の特殊な幸福である。

(Roosevelt. 第二十六代、二十七代の大統領。(西暦一八五八年―一九一九年))
動機
經典
典範
玉の御聲
草莽の微臣

自修文

三　ことばの話

佐々醒雪(一)

(一)名は政一。醒雪はその號。國文學者。文學博士。京都の人。大正六年歿。年四十六。

不思議なものは、ことばの變遷である。日本語は幸にして二千年近い記錄を存してゐて、世界で頗る古い言語の一つである。しかも、萬世一系の帝室を戴いた同一民族の間にのみ發達したので、今から約千年前にできたといはれる竹取物語や伊勢物語を見ても、半分以上は、今日も平生使用してゐる言語でできてゐる。こんな國はいふまでもなく、世界中にまたとはないのである。一千年前即ち十世紀前といへば、今の歐洲列强國などは、皆全くの野蠻國であつた。かく久しい時代を經てゐるから、同じ語でも、その意味の頗る變化したものが多い。

例へば、甚だしく變遷したものは「いへ」といふ語であらう。昔は「いへ」といふと、家族とか家庭とかいふことで、隨つて「いへあるじ」といへば、一家族中の主長で、即ち戸主のことであつた。然るに今

世紀　一世紀は百年間をいふ。
主長　かしら。

薄倖者　ふしあはせな人。

日「家」といふと、家屋即ち建築物のことで、「いへぬし」は貸家の持主の義に用ひられてゐる。

更に甚だしく變化してゐるのは、形容詞などに多い。例へば、平安朝の人が「あはれなる人」といふと、大抵は美人のことである。我が貧民や薄倖者を「あはれなる人」といふのとは、雲泥の違ひではないか。「かなし」といふ語も今日では悲哀の義にのみ使ふが、古は極めて寵愛してゐる妻や子のことを「かなしき妹」とか、「かなしくする兒」とかいつた。

かういふ變遷は、そんなに古い時代ばかりではない。漢語が頻りに用ひられ始めてからも、同樣な變化は認められる。例へば、「不用」といふ語は、今日では「入用でない。」といふことであるから、紙屑買が「御不用物はございませんか。」と呼んでくる。然るに中古では「不用なるもの。」といふと、用ひるに堪へぬとんまか、あはうのことで、更に降つて武家時代に入ると、「爲朝が不用であつたから、父爲

語源　ことばのもと。

列擧　かぞへあげること。

抹茶　製茶を茶臼でひいて粉にしたもの。

義が九州に追つた。」などと記してあつて、不用といふのは、いたづらもの、または無法者の義である。鎌倉時代に「不用なものはございませんか。」と呼歩いたら、「いたづらものはないかね。」と呼歩く鼠取藥と間違へられたであらう。

これ等はまだ單なる變遷で、中にはその變遷の間に、語源の意義に對して奇怪な矛盾を生ずることもある。漢方醫が廢れて藥を煎じることがなくなつても、藥鑵といふ名は殘つてゐたり、その他不思議な言葉を列擧すれば際限もないが、就中希代なのは、「茶碗」や「さかな」である。

日本でまだ立派な陶磁器のできぬころ、支那から渡つて來た上等な陶磁器は、專ら抹茶の席ばかりに用ひたから、これを茶碗といつたのである。然るに日本で硬い上等なものが澤山できるやうになると、御飯を食べるにも、番茶を飲むにも陶磁器を用ひはじめた。そこで飯食茶碗とか、茶飲茶碗とかいふ不思議な語が

副食物　おかず。

下戸　酒のきらひなもの。

できた。今日では珈琲茶碗とさへいつてゐる。茶を飲むのが茶碗なら、飯を食ふのや珈琲を飲むのは、飯碗、珈琲碗とでもいひさうなものだが、さう理窟通りに行かないのが言葉である。

「さかな」とは、本來酒を飲む時に食ふものといふ語である。「さか」は、「酒樽」「酒盃」の「さか」である。「な」はなんでも副食物にするもののことで、古は野菜類は勿論皆「な」であるし、昆布や若布などのやうな食べられる海藻は、皆磯菜といつた。それから魚類は、「な」のなかの上等なものであるから、上等な建築用材を「ま木」といひ、屋根をふく上等な草を「ま草」といふやうに、これを「まな」と稱へた。今の「まな板」「まな箸」などいふ語は、これから來てゐる。然るに酒といふものは上戸即ち上等な家でなくては飲用しないし、かつ酒を飲む時は、今も昔も贅澤な副食物を求めることが普通であるので、自然魚類は酒席に多く供せられて、「さかな」といふ異名を得るやうになつた。すでに魚類が「さかな」といふことに定まつてしまふと、下

たづさはる　關係する。從事する。

叩き大工　下級の大工。

故意に　わざと。

轉訛　かはりなまること。

江戸歌舞伎　江戸で行はれた芝居。

人爲的　人の力でことさらに作ること。

變造語　つくりかへたことば。

戸が食べても、やはりこれを「酒な」といふのは、飯を食べても、やはり茶碗といふのと、同じ不思議である。

言葉はまた使つてゐる中に、だんだん下落するものである。例へば、「大工」といふ語は工即ち工藝家中の俊秀なものの尊稱で、多くの小工どもの統領を呼ぶ名であつた。然るに今日では建築事業にたづさはるものは、小屋掛の叩き大工でも、やはり大工である。かの棟梁、親方なども同樣で、今日は、一人の手下もない、子分のない男でも、印半纏さへ着てゐれば、即ち親方であり、棟梁である。

最後に一つ故意に轉訛させた例を示さう。言語の變遷は大抵自然のものであるが、江戸歌舞伎などには、故意に作つた人爲的な言葉がある。一時兵隊言葉といつて、丸木橋を獨木橋といつたり一軒家を獨立家屋といつたりしたこともあつたが、今ではそれも廢止されたやうだ。その他には迷信から來た變造語もいろいろある。例へば、海邊に生えてゐる蘆といふ草を、「惡し」と聞える

齋宮　いつきのみや　ともよむ。皇女で大神宮にお仕へになる方。

窮極　はて。

といつて、わざと「よし」と呼びかへたり、四を「死」と通ずるので「よ」といつたり、梨を「ありの實」、硯箱を「あたり箱」、鯣を「あたりめ」といふ類が行はれてゐる。古も伊勢の大神宮に御奉仕になる齋宮の御所では、髪のない僧侶を、わざと「髪長」などといつた例もある。

要するに、言語界の不思議な現象は、同一の語が、例へば、髪長といつて髪のないことを表すやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、その變化は蓋し窮極を知るべからずといふのが至當であらう。

——醒雪遺稿——

四　白い曙

三木露風

あゝ、白い曙、
白みくる谷間の春のあけぼの
山二つ三つもやより見え、

さやかに鳴きとよむ雉子のこゑこゑ。
山櫻
誰が折捨てし、かの
水に落ちて、
流はこれを洗へり。
青苔にかたよれるうす紅の花片。
やはらかき草の蓐に
曙は起上りて、
稚兒のごとく目をこすり、
さみどりの匂の染みて、
すゞしく身震ふ。

——青き樹かげ——

(一)儒家。安永五年(一七四三)歿。年五十四。
(二)官幣中社八坂神社のこと。京都市下京區清井町。
(三)臨濟宗。京都市下京區小松町。

度を失ふ
いづくんぞ知らん
似たもの夫婦

五　池野大雅とその妻

池野大雅は京都祇園のほとりに住まつてゐたが、急に思ひ立つて大阪へ行くといつて、無造作に家を出て、建仁寺の前邊まですたすたと來かゝると、不意に後から「もしもし。」と呼ぶ女の聲が聞えた。振返つて見ると、息を切らして追つかけて來た女が、額の汗を拭ひながら、無言で一束の筆を差出した。はつと思ふと、そゝつかしい彼は度を失つて、幾度もそれを頂きながら、「これは何處の御婦人か。よく拾つて下された。」と夢中で禮をいつて、そのまゝすたすたと歩きだした。いづくんぞ知らん、筆はわが家に忘れて出たのを、後でそれと發見した妻の町子が、驚いて後から屆けたのであつたが、無頓着な夫がそれと氣のつかない樣子を見ると、町子もまた無言で、そのまゝ引返した。似たもの夫婦で、どつちも劣らぬ變りものであつた。

引張だこ
たつての頼み
揮毫

大阪へ出た大雅は、すでに當時の大家であるから、禮を厚うして、八方から引張だこのやうに招待を受けた。その中に大和屋某といふ豪商、町人ながら大雅の名を慕うて、店の暖簾を是非とも先生に

池野大雅筆蹟

書いていただきたいとたつての頼みに、無造作な彼は快く承諾して、早速例の筆を携へて、同家へ赴いた。

下へも置かぬ歡待を斥けて、直ちに揮毫の準備をさせると、主の需は「大和屋」といふ屋號の三字を、大書してくれといふのであつた。

(一)萬福寺のこと。京都府宇治郡宇治村大和田にある。

雄勁

(圓)

かいもく行方知れず

神隱

けろり

呵々

矢も楯も堪らぬ

五歳の年に黄檗山(一)の衆僧を驚かした彼の筆勢は、年と共に雄勁を加へて、立所に龍蛇の躍るが如く、まづ「大和」の二字が成つた。すると急に何を思ひ出したか、彼は突然筆をおいて、座を立つた。「どうなされましたか。」「いや少し。」といふかと思ふと、不意に座敷を出たまゝ、忽ち姿は消えてしまつた。

初はかはやへでも立つたものと、別に氣にも留めなかつたが、いつまで待つても歸つて來ぬので、不思議と家中を捜させたが、影も形もないのでさわぎとなり、人を八方へ出して見たけれども、かいもく行方は知れなかつた。大雅先生が神隱に遭つたと、奇怪な風説が立つてから五日目、けろりとして大和屋の暖簾を潜つた當人は、大口あいて呵々と笑つた。「なんの。大和と書いて見ると、ふと吉野のことが心の中に浮かんだ。今頃は一目千本が滿開であらうと思ふと、矢も楯も堪らぬので、ちよつと花見に行つて來た。しかし、幸に間

(一)歌人梶女に養はれてまた歌名があつた。歌集を百合遺集といふ。

さびた喉

に合つてよかつた。」大和屋の人々は、あきれて眼をみはるばかりであつた。大雅は平氣で墨を磨直させて、殘つた「屋」の字を大書した。

彼はいつも清貧に安んじ、家に在つてはよく三絃を取出して、さびた喉に古曲を唄つては樂しんでゐた。妻の町子はまた筑紫箏の名手で、夫と一緒にあはせものなどをして、睦まじい家庭を作つてゐた。

玉瀾筆蹟

町子は祇園林の茶屋百合(一)の女で、夫を見習ひ畫をもよくして、玉瀾と號した。或時玉瀾は、夫と一緒に冷泉殿の邸へ上つた。

冷泉殿は和歌の家、この卿に見えるのは、旁、以て敷島の道を學びたい爲でもあつた。玉瀾の名は豫て聞く、どんなみやびな女かと、御

かいまみる
とんと
目通り
もの堅い
謝物
添削す

内の女房たちは、爭つてこれを垣間見ようとひしめいた。豈圖らんや、大雅が連れて邸の門を潜つた女は、糊の硬い木綿着物を纏うて、手には魚の籠を提げてゐた。「とんと草鞋を穿かぬ大原女のやうでござんすなあ。」はしたない女房たちの中には、聲を出して笑ふものさへあつた。しかし、玉瀾は平氣で卿の目通りへ出た。夫は高名な畫家、しかも招かれた邸へ上つたのであるから、たゞ一通りの禮儀だけで事は足るのであるが、無頓着に似てもの堅い玉瀾は、かりそめにもものの師と賴む人の許へ始めての入門に際して、季節の謝物を携へることを忘れなかつたのであつた。

殿の卿はその心を喜んで、「歌はすべて心を以て基とする。そなたの歌も、その氣象に合ふやうに添削して取らする。」と仰せられた。面目を施して、目通りを下つたかの女は、その後も屢、詠草を携へて、卿の門を潜つた。

畸人
荒妙
和妙

畸人の夫にふさはしい妻、しかも家庭圓滿に、一生連添つた大雅に先立たれて後の玉瀾は、形見の三絃を合はすべき箏の調も空しく、淸く寂しい孤獨の餘生を送つてゐたが、夫に別れて九年目、天明四年の九月、溘焉としてその後を追つた。

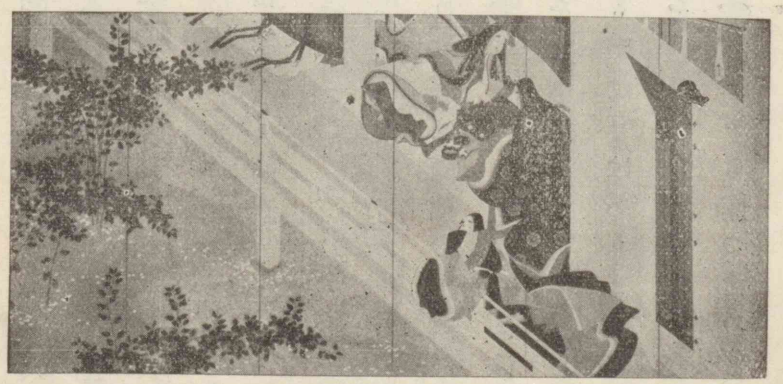
——本山荻舟「名人畸人」による——

六　女子服飾の變遷

上代の女子は髮を束ねて後の方に垂れ、衣服は筒袖の上衣に褌を穿ちました。上衣は丈が短くて膝頭あたりまでしかなく、褌は太い筒形で、ズボンに似て居ります。まづ褌を穿ち、それから上衣を着、その上に帶をしめました。これは男も女もかはりはありませんでしたが、女子は肩に領布をかけ、腰には裳を纏ひました。袴は皆左袴でございました。材料には荒妙と和妙、麻、葛、楮などから作つたのと、

妙とて絹から作つたのとがありました。

三韓、隋、唐の文明を傳へた後は、材料も錦、綾、紗の如きものを用ひ、刺繍も進歩し、女子は太く長き筒袖の上に唐衣を着、袴は右袴に改りました。平安時代になつて、貴女の服裝はいはゆる十二單となりました。十二單とは内衣、緋袴、單、五衣、紅の打衣、表着、唐衣、裳を取重ねたのを申します。五衣は五つに限らず、幾領にても重ねたので、これを正裝の服とします。平服には唐衣、裳を着けず、表衣の上に小うちきを着けたのみで、これを小うちき姿とも申します。百人一首の繪を見ると、この二種



平安時代の服裝（岩田豐麿筆）

の區別がわかります。宮女の服裝は近代に至るまで大きな變化はありませんでしたが、武家の女流の服裝には、小うちきを用ひないで、小袖を着て、その上にうちかけ、またはかいどりを着ることとなりました。庶民は男も女も袴を着けることが次第に廢れました。

女子の服裝

徳川三百年の昇平は、女子服裝の上にも種々な變遷をあらはしました。その初世には、裾も長くなく、袖も短くて七八寸に止り、華美なものは山水花鳥の大模樣をすり箔にて表し、後には金絲を以て縫ひました。元祿の華美な時代を經て、袖の長さ次第に伸び、後には一尺五六寸ともな

枚擧に遑ない

風靡す

つて、振袖といつて喜びました。帶も初は二三寸幅でしたが、後には八九寸になり、金襴、緞子、綸子、琥珀、ビロード等、外國輸入品をも多く用ひるやうになりました。帶の結方にもさまざまあつて、時々の流行を成しました。髪を結ふことも德川時代に始つて、時々の流行變遷は、枚擧に遑がありません。今日なほひろく行はれる丸髷、島田、銀杏返、唐人髷などは、皆幕政時代の遺風であります。笄や簪もこれにつれて、變遷もあり、種類もあります。

明治維新の後、男子は頭の髷を切り、帽子を被り、洋服を着ることも日一日と多くなりましたが、女子の風俗はなほ舊きを守つて、年々の趣味に流行の差はありますが、髪形にも、服裝にも、なほ昔の面影が見られます。女子の洋裝は今なほ男子の洋裝のやうに多くは行はれませんが、都會地には洋裝する人が年々殖えて參ります。また束髪の流行は都鄙を風靡する勢で、これは繁劇で簡便を尙ぶ社會生活の反映かとも思はれます。けれどもその上に西洋流のバット[一]、ボンネット[二]を用ひることは、洋裝の時の外はありません。

(一) Hat.
(二) Bonnet.

七　仁和寺の法師

吉田兼好

一　石清水[三]にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心憂くおぼえて、或時思ひたちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺[四]、高良[五]などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて、かたへの人に逢ひて、「年比思ひつることはたしはべりぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも參りたる人毎に山へ登りしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ參ることこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞいひける。すこしのことにも先達はあらまほしきことなり。

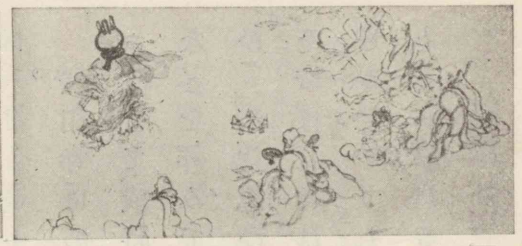
(三) 京都市の西郊花園にある。宇多法皇の創建。俗に御室といふ。
(四)(五) 共に石清水の麓にある末寺、末社。

かちより詣づ
本意
先達

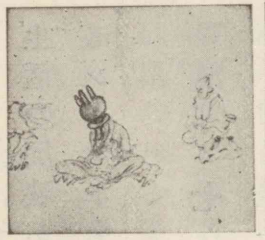
（鼎）かづく

たゞ腫れに腫る

がりゐて行く



なかへの舞（前田青邨筆）その一

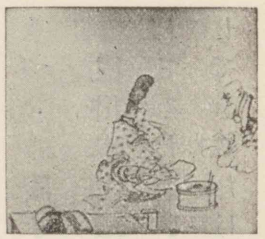


なかへの舞

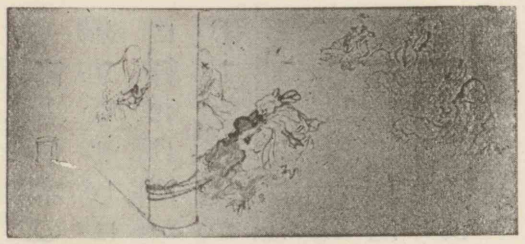
これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、おのおの遊ぶことありけるに、醉ひて興に入る餘り、傍なる足がなへを取りて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顏を差入れて舞出でたるに、滿座興に入ること限りなし。しばし奏でてのち抜かんとするに、おほかた抜かれず、酒宴ことさめて、いかがはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪難かりければ、なはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子をうち掛けて、手をひき、杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きけるに、道すがら人の怪しみ見る

くゞもり聲

からき命まうけて



（前田青邨筆）その二



なかへの舞（前田青邨筆）その三

こと限りなし。醫師の許に差入りて、向かひゐたりけん有樣、さこそ異樣なりけめ。ものをいふにも、くぐもり聲に響きて聞えず。かゝることは書にも見えず、傳へたる敎もなしといへば、また仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など枕上によりゐて泣悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、或者のいふやうは、「たとひ耳鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。力をたてて引き給へ。」とて、藁のしべをまはりに差入れて、かねを隔て、首もちぎるゝばかり引きたるに、耳鼻かけうげながら抜けにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。

三　木のぼり

そのことに候

高名の木のぼりといひし男、人をおきてて、高き木にのぼせて梢をきらせしに、いと危く見えしほどはいふこともなくて、おるゝ時に、軒たけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ。」と言葉をかけしを、「かばかりになりては、飛下るともおりなん。いかにかくいふぞ。」と申しければ、「そのことに候。目くるめき枝危きほどは、おのれが怖れはべれば申さず。過は安き所になりて、必ず仕ることに候。」といふ。あやしき下臈なれども、聖人の誡にかなへり。鞠も難きところを蹴出して後、易く思へば必ずおつとあるやらん。

―徒然草―

八　舊藩の明君

堵に安んず

徳川時代三百藩は、各その土地人民を領して、一々別國の觀を呈してゐたが、いづれも學者を聘し、賢者を擧げ、學問を勸め、産業を起し、できるだけの善政を布いて、封内の人民をして、その堵に安んぜ

分に安んず

しめるやうに苦心した。鎖國の二百六十餘年間は、かくして太平無事な世であつた。上下の階級がやかましく、職業世襲の制度で、技能材幹あるものの新進の途は十分に開けて居らなかつたが、四民皆その分に安んじ、その業を樂しんで、何等の不平もなく、安穩な生活を營んで居つた。凡そ世界の歴史で、これほど安樂な時世はなかつたらうとさへ、或外國の史家はいつた。

實踐躬行
齊家
治國平天下

大學、中庸、論語、孟子の四書は、忠孝の道を訓へる儒教の經典で、武士はこれを學んで、實踐躬行の標準とした。いづれも齊家を本として、治國平天下の大道を教へたもので、個人の修德から社會の改善に進まうとするのである。孟子の書には、殊に人君たる道、人民を治める道を說いた文章が多い。君主は天に代つて人を治めるので、君德のないものは君主たる資格がないといふ支那思想が、その根本になつて居る。各藩の藩主は皆それを自分のこととして、德を修め、

進講

治に勵むことに工夫した。各藩の儒者は皆この旨を以て主君に進講したのである。間暗君で民を虐げたものもないではないが、概しては各藩に賢明な主君があつて、民衆の福利を圖つたのである。各藩の藩祖には明君と稱へられた人が多く、各その遺訓を子孫に傳へて居り、歴代の主君はまた皆藩祖の遺訓を守つて、ひたすらその家門を辱めまいと考へて居つた。今各藩主の顯著な治績について、その二三を記さう。

封ず

徳川義直は家康の第九子で、尾張名古屋の藩祖である。慶長十二年始めて尾張に封ぜられ、十四年名古屋に城を築いてこれに居り、慶安三年五十一歳で歿した人である。この頃は戰亂が纔かに息んだばかり、人々は武藝を修めるのみで、諸藩共に學政に心を傾ける人は少かつた。義直はこの時に於て儒教を尊奉し、聖堂を建てて釋奠の祭を行ひ、經籍も多く集めて、盛に藩中の學問を奬勵した。文教

聖堂釋奠

鍾愛

に於て實に諸藩に率先したのであつた。尾張の敬公といふのはこの人で、明治三十三年正二位の贈位があつた。

紀州和歌山の藩祖頼宣は義直の次の弟で、家康の第十子である。大阪の冬の陣に、十三歳の初陣をした人で、智略もすぐれて居つたから、殊に家康に鍾愛された。夏の陣に軍功のないのを悲しんで、「十四歳は再び來らず。」といつたのは、名高い話である。或時藩吏の某々等が、諸所の土地を開拓して、新田を作ることを願つた。頼宣はこれを聞いて、「わが領分の中には、數多の名所舊蹟があつて、累代の和歌集にも載つてゐる。ただ實利をのみ圖つて、天下後世のもの笑になるな。」といつたので、そのことはやめになつた。

頼宣の同母弟頼房が水戸の藩祖で、その第三子が有名な光圀である。忠孝の志も厚く、仁慈の德にも富んで居つて、種々な善政を施したが、就中後代までもその偉勳を留めたのは、學者を集めて大日

修史

陞叙

儉素

(一)字は了介。中江藤樹の門人。京都の人。元禄四年(二三年)歿。年七十三。

德川光圀

本史の編纂に着手したことである。それが爲に藩祿の半分を割いてあてたのである。國體論、尊王論の根ざしはこゝに生じたので、光圀の修史事業が、遠く明治維新の原因をなして居るのである。明治二年從一位の贈位があつたが、同三十三年には更に正一位に陞叙せられた。

池田光政は輝政の孫で、初め因幡、伯耆を領したが、後備前の岡山三十二萬石の主となつた。少年の頃の夜食は茶漬に燒味噌のみであつたといへば、その儉素のほども知られる。後熊澤蕃山を用ひて庶政を改善した。その語に、「人に下り、目の前のことをも人に尋ね相談して善を取るところ、儉約の第一なり。衣服、家作等は儉約の枝葉たるべきものなり。」といつたのを見れば、いかにその人言を容れるのに工夫したかがわかる。或時封内の農甚助といふものが、親孝行の廉で褒賞を得た。それを羨んで、甚助の隣のものがその眞似をしたところ、光政は同じくこれにも褒賞を與へた。或役人「彼は似せもものでございます。」といふと、光政「似せでもよい。孝行を勵むがよい。」といつたさうである。

加賀百萬石の前田家の第五代の主君を綱紀といつた。三歳で父の後を繼いで、八十二歳で死ぬまで、七十九年間在職したのも珍しいことである。藩政を改革し、學問を奬勵した事蹟は、一々擧げるに遑がない。その領土加賀、越中、能登の三個國の獄屋が、全く空虛であつたといふのでも、その政治の行屆いた有樣が知られよう。德川光圀が「嗚呼忠臣楠子之墓」といふ碑を湊川に建てたのも、この綱紀の懲憑に基づいたのだといふ。

人言を容る

懲憑

風儀

適材を適所に用ふ

上杉鷹山、名は治憲、米澤の城主である。學問を好み、學者を禮遇し、時々國中を巡視して、孝行を表彰することを怠らなかつた。農業を奬める爲、自ら泥田の中に立つて鋤を執り、家老以下をしてこれに倣はしめたこともある。儉約を第一とし、種々産業を興すことを令したので、藩中の風儀も全く改つた。米澤織など今日の産物となつて居るのも、全く鷹山が勤勉の遺德である。

上杉鷹山

熊本藩の賢君は細川重賢である。よく役人を抜擢して適材を適所に用ひたので、學問も興り、士風も振ひ、藩政も面目を一新した。天明年間の大饑饉の時のことであつた、勘定方の役人が重賢に向かつて、「今年は収入の減少が夥しいから、諸士の祿高を減らして入用に立てたらば。」と建議した。重賢これを聞

大節に臨みて死を致す

いて、「大節に臨みて死を致すのは武士ではないか。武士の俸祿を減らしては、事に臨んで義氣の緩むこともあらう。減らすことは相成らぬ。」と承知しなかつた。また米價が騰貴して、隣國では餓死者が頻りにできたほどであつたが、重賢は國中に令して、米價の小賣値段を定めさせ、若し市中の米が皆無になつたら、藏の米を出して補ふといふことに定めたので、領内の米價は直ちに下落した。されば、その後參勤交代で東上する途中、豐後鶴崎まで三十里が間は、國中の人民が皆路端に跪いて感泣したといふ。

參勤交代
(一)大分郡の町。

かういふやうな明君の事蹟は、數限りもなく多い。德川時代の昌平無事も、全く偶然ではなかつたのである。

(二)評論家。高知縣の人。明治三年生。

自修文

九　樹下漫筆

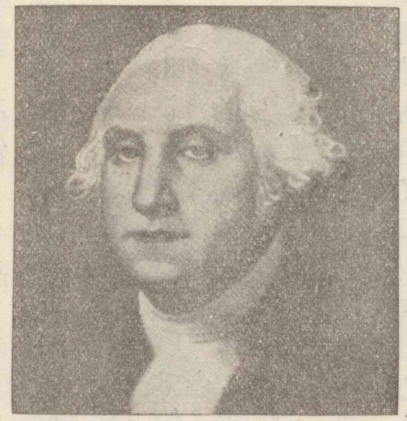
馬場孤蝶(二)

古來名高い偉い人々は皆幸運であつて、それぞれ不思議に危

難を免れて、その優越な地位に達することができたとの傳說がある。

人の心は西洋も東洋もさう違つてゐないのであるから、傳說などになると、東西その揆を一にするものが少くない。

米國の獨立戰爭より以前の或戰の時に、或士官が兵を率ゐて森の中に埋伏してゐると、敵の若い士官がその間近まで來て、悠々と偵察してゐるので、それを射擊すれば丸の中ることは必定だとは思つたものの、その若い士官の斥候ぶりが、いかにも落着きはらつてゐるのに感服して、それほどの勇士をむざむざ狙擊するに忍びず、そのまゝ見遁してしまつたが、その大膽な若い士官は、後に米軍の元師となり大統領となつたジョージ・ウ



ウシントン

揆を一にす　ゆきかたが同じである。

米國　アメリカ合衆國。

(一)イギリス本國との戰。(西暦一七七五年―一七八三年)

必定　かならず。

狙擊　ねらひうち。

(一)George Washington.

ォシントンその人であつたことが、後になつてわかつた。

こんな話を何かで讀んだことを記憶してゐるが、「續武將感狀記」を見ると、豐臣秀吉について次のやうな話がある。

豐臣秀吉（長原孝太郎筆）

長篠の戰の時は、昌景はもう年が六十餘りであつた。甲斐勢の先鋒で、敵と間近に相對してゐたので、敵が仕寄りを付けるのを見てゐると、一人の武者が眞先に進んで、柵の杭はかう打つものだとか、繩の結びやうはかうしなければいけぬなどと一々指圖

西暦一七九三年大統領となつた。後世呼んで國父といふ。(西暦一七三二年―一七九九年)

(一)南條八郎の著書。全二卷。

(二)武田家四天王の一人。天正三年(一二二三五年)五月戰死。

(三)三河國設樂郡長篠村。

(四)信長、家康の軍。

仕寄り　しよせともいふ。だんだん押迫つて行く戰のし方。

をし、自分で繩を男結にしめたりしてゐる。昌景はそれを見て、「あの武者は尋常な雑兵でない。あれを撃て。」と部下に下知して、馬上に突つ立つたところへ、(一)三河の陣から撃つた鐵砲の丸が中つた。けれども昌景は馬から落ちずに采配を口にくはへ、両手で鞍の前輪をおさへて死んだ。實に大剛の勇士だといつて、後々までも傳へられたのであるが、柵の繩を男結にしてゐた武者こそ羽柴筑前守であつたと、後に知れたといふのである。――(二)孤蝶隨筆――

下知　命令を下すこと。
(一)家康の陣。
采配　昔大將が家來を指揮する爲に持つたもの。
(二)大正十三年東京新作社發行。全一冊。

一〇　新綠の頃

近松秋江

心醉す

自然の美に心醉し、自然の恩寵を心から感謝しながら、柔かい自然の懷に入つて、甘えたいやうな氣持にさせられるのは新綠の頃である。

新綠の頃になると、私は年少の頃から、たゞ何故となく懷かしいといふ感情が、胸の底から湧起るのが常である。その感情は何を對象として起るのであるか、明らかにはわからない。滿目蕭條たる冬の季節から、天地が生々の氣に蘇つて來て、自然は豐麗な色彩で飾られる。この四圍の環境の變化が、人間をして自ら生存の幸福を意識し、生命の躍動を覺えしめるからであらう。

その頃になると、人々は戸内よりも野を思ひ、山を慕ひ、草木に親しむやうになる。どこかの青い芝生の上で仰向に寢轉んで、思ふ存分に自然の寵兒になつて、人間生活の苦味を忘れて見たいやうな氣がする。

野にはもう菜の花の黄もすがれて、却つて白い菜の花がいつまでも咲續けてゐる。その花の生まれ代りでもあるかのやうな黄や白の蝶々も老いて、たうの伸びた衰殘の花から花へと戯れてゐる。青い麥は穗をぬいて來た。そら豆やゑんどうの莖が成育して、淡

(豌豆)

紫の花がもの憂い五月の日に照らされてゐる。蓮華草の紅紫色な花は今が盛で、所によつては、農夫は稻を植ゑる爲に、それ等の野草を掘返して、水田に水をしかけてゐる。春雨の降りかさんだ小溜りの用水は、畦の小草を浸して、どぶどぶと流れてゐる。どこからともなく小蛙の啼く聲が懷かしく聞える。かういふ時、私はたゞ生きてゐることの幸福を覺え、生命の愉快を感ずる。そして、それと共にまた、靜かに暮れて行く晩春の日の永いのに倦み、夕暮の新綠に映る灯の色の懷かしさにも何とは知れず聊かもの足りないわびしさや、淡い哀愁をそゝられることもある。

東京(一)の郊外の住宅にゐても、五月の中頃がちやうど新綠の最もいい時期である。春宵千金といふが、花期よりも寧ろ新綠の頃の方が、眞に(二)一刻千金である。天は人類に對して時に冷酷なこともあるが、たまにはまた惠深いといふことを思はしめる。新綠の頃には、人

(一)東京市外中野。

(二)「春宵一刻直千金。花有ニ清香一月有レ陰。云々」蘇東坡

晩霞

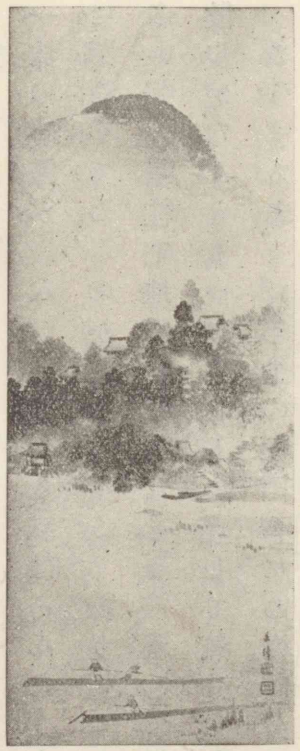
は最も天の惠を感謝する氣にならされる。朝起出て、靜かな旭に映發してゐる軟かい黃綠の色に對するのは、なんともいへないほどよい。この頃の常として、日中にはよく風が起るが、よい夕方になると、晝間の風は靜まり、遠くの田園の森や家の彼方には、蒼茫として一抹の晩霞がたなびいてゐる。私はそんな夕方には、なんとなく家に閉籠つてゐるのが惜しいやうで、餘り遠くない所の森や、木立の多い郊外の住宅地のまはりなどを逍遙して見る。たゞそれだけの散歩が、なんともいへず樂しい。そして、氣分を和げる。

さうすると、まだ年少の頃、田舍(一)にゐた時分のことなどが懷かしく想ひ起される。青い穗をぬいた麥の畑の間の野徑を歩いて行くと微かに柔かい植物性の匂がして、四方を顧望すると、野も山も淸淸しい新綠を裝ひ、遠くの山は淡蒼く霞がたなびいてゐる。野から戻つてくる村の童子が麥の莖を取つて、それを器用に口笛にして

(一)岡山縣和氣郡藤野村。

吹いて行く。

新緑の頃には、どこへ行つても、すべてこの世界が美しく樂しいものに思はれる。その新緑も、やがて夏が來、秋が來、冬がくれば、空しく枯れるものだと知りながらも、そんなことなど勿論考へる暇もなく、たゞ眼に見る清々しい生き生きした綠の世界が、人間をして生存をたゞ樂しく思はせる。夏の暑さ、冬の寒さには、つい愚痴をこぼすものがあつても、この新緑に對して愚痴をいふものはなからう。



宇治（田南岳璋筆）

私は或年、それはもう五月の末頃であつたが、京都から宇治(一)の方を巡つて、奈良の方へ旅したことがある。桃山から宇治へ行つた日は、ひどい嵐であつたが、その夜宇治に泊つた時には、嵐はあつらへ向の雨になつて、しとしとと一晩ぢゆう若葉に降りそゝぐ音を聽いて靜かな夜を明し、心ゆくばかり宇治の新緑を味はつて、翌日雨の晴れかけた午頃からそこを立つて、奈良の方へ向かつた。汽車の窓から見てゐると、南山城のそのあたりは、殊のほか新緑の美しい所である。柿の若葉などが殊に多く見られる。やがて木津川(一)を渡り、木津驛を經て奈良の方へ行くと、午前一旦晴れかゝつた空は、その頃の氣候の常として、再び雨模樣の雲が湧いて、それが次第に濃厚になつて來た。そして、笠置山(二)脈に續く奈良の東方の連山には、墨を流

新緑の奈良（山本森之助筆）

愚痴をこぼす

(一)京都府久世郡宇治町。京都の南方。

(一)水源は伊賀盆地。南山城を流れて淀川に合する。

(二)近江、伊賀、大和にわたる山脈。

ものものし

(一)奈良縣生駒郡。奈良市の西南四里。
(二)大和、伊勢、紀伊に跨がる山脈。
(三)奈良の南方。
(四)大和、紀伊、河内の境。

したやうな黑雲が、ものものしく中空を鎖して、その爲に山の形が一層鮮かに浮上つて見えた。

その時私は、奈良を通り過ぎて法隆寺(一)へ行く道すがら、大和平野の遠景近景を、心行くばかり車窓から眺めた。大臺ケ原(二)であらうかそれとも奥吉野の金峰山脈の一角でもあらうか、初瀬(三)から多武峰に續く一帶の連山の上に當つて遠く嶮岨な高山の頂か幽かに望まれるのも、好い眺であつたが、少し右手の方の西南に當つて、金剛山(四)が青黛色をなして、巍然として聳えてゐるのが、なんともいへず崇美であつた。それは春も十分に熟した新緑の頃でなければ見られない山の色、野の景色であつた。それにつけても思ふのは、蕪村の句に、「大和路や宮もわら屋も蕪かな。」といふのがある。蕪は晩春初夏の新緑の頃には、どこからともなく飛んでくる小鳥である。そして、この蕪村の句は、實によく大和路の特徴を、僅かに十七字で遺憾

沛然

鳴りはためく

なくいひ表してゐると思ふ。

また或年のこと、同じ大和路を經て、新緑の初に吉野へ行つた。まだずつと奥の方へ行けば、櫻はいくらか殘つてゐるといふことであつた。晝間から強い南の風が吹荒んでゐたが、山を登つて行く頃、一天眞暗にかき曇つて、その晩遲く宿に着いて、一浴の後夕飯を認めてゐる時分から、山を流すかと思はれるやうな凄じい豪雨が沛然として來つて、雨戸に鳴りはためいた。私はなんとなく悲壯な感慨を以て、吉野の雨聲を聽いてゐた。

ところが翌朝になると、一山の風物は拭つたやうに清朗になつて、後醍醐天皇の吉野宮址に立つて四顧すると、金剛山は昨夜の雨に洗はれて、句ふばかりに懷かしく、西方の天に浮上つて見えた。

私はそれから櫻の若葉の蔭を踏んで、延元陵に詣でたのであつた。

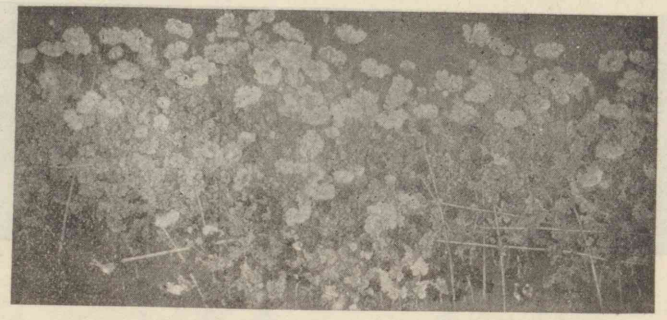
(一)Anemone.
(蒲公英)
(芍藥)

しやくやく（小林觀爾筆）

一一　五月の太陽

萬造寺齊

初夏、
もうアネモネは盛を過ぎ、
たんぽゝの花も終りに近づき、
今絢爛たるしやくやくと、火焰
の如きけしの季節。
見わたす京都の郊外は目覺め
るばかり新緑に輝き、
花の匂、若葉の匂、土の匂、肥料の
匂、
そのほか無數の名狀し難い微



けし（宮田司山筆）

妙な匂が
馥郁として大地を蔽ふ。
花園、太秦、嵯峨嵐山……
林を横り、
小川を渡り、
若草を踏み、
木蔭にいこひ、
人家の間を通りぬけつゝ、
白いほこりつぽい田舍道を
足にまかせて杖をひけば、
五月の大氣の柔かさ、
五月の日光の暖かさ、

嵯峨（小林雨郊筆）

五月の微風の芳しさ

名のない路傍の雜草も時を得顏に蔓延し、

飽くまで榮養を吸收しつゝ成長を急ぐ牛蒡、ゑんどう。

柔かい、みづみづしい豐熟に近い一面の穗麥。

樹木の繁茂。

雲雀の狂喜。

昆蟲の飛翔。

重疊しつゝ起伏しつゝ地平を限る綠の連山。

交感

奔放

南へ急ぐ溪流のよろこび勇む不斷の跳躍……

大地はうごめく

自然の胸は激しく波打つ。

（私は神秘的な交感により自分の全身全靈にその力強い脈搏を、その快い體溫を、その芳しい呼吸を感ずる。）

創造するもの、成長するもの、

醱酵するものの奔放な精神、

その憧憬と情熱と、

その憤激と昂奮とは、

息づまるほどあたりに充ち滿ち、

洪水のごとくあたりに渦卷く。

陶醉

私は大きく胸を張り、
渇いたものの慾深さで、
あたりに漲る五月の靈氣を、
自然の無量のいのちを吸ひこむ。
（あゝ、喜ばしいこの若がへり。）
私の眼は昂奮に輝き、
私の血は陶醉に燃え、
私のいのちは健康に溢れ、
私はすべての成長するものと、
すべての歡喜し陶醉するものと
共に五月の太陽を、
その永久の光燿を讃へる。

一二　田舍の自然

吉村冬彦

田舍の自然は確かに美しい。空の色でも、木の葉の色でも、都會で見るのとはまるで違つてゐる。さういふ美しさも馴れると美しさを感じなくなるだらうといふ人もあるが、さうとは限らない。自然の美の奥行は、さう見すかされ易いものではない。永く見てゐればゐるほど、いくらでも新しい美しさを發見することができるはずのものである。できなければ、それは眼が弱いからであらう。一年、二年で見飽きるやうなものであつたら、自然に關する藝術や科學は、數千年前に完結してしまつてゐるはずである。

六つになる親類の子供が、去年の暮から東京に來てゐる。それに「東京とお國とどつちがいいか。」と聞いて見たら、「お國の方がいい。」といつた。「どうしてか。」と聞くと、「お國の川には蝦がゐるから。」と答へた。

この子供の蝦といつたのは、必ずしも動物學上の蝦のことではない。蝦のゐる清冽な小川の流、それに翠の影をひたす森や山、河畔に咲亂れる千草の花、さういふやうなもの全體を引きくるめた田舍の自然を象徴する蝦でなければならない。東京で魚屋から川蝦を買つて來てこの子供にやつて見れば、このことは容易に證明されるであらう。私自身もこの蝦のことを考へると、田舍がこひしくなる。しかし、それは現在の田舍ではなくて、過去の思出の中にある田舍である。蝦は今でもゐるが、「子供の私」はもうそこにはゐないからである。

しかし、この「子供の私」は、今でも「大人の私」の中のどこかに隱れてゐる。そして、意外な時に出て、外界をのぞくことがある。例へば、郊外を歩いてゐて、路端の名もない草の花を見る時や、或は遠くの松の木の梢の神秘的な色彩を見てゐる時などに、僅かの瞬間だけではあるが、この蝦の幻影を認めることができる。それが消えたあとに殘るものは、淡い「時の悲み」である。

自然くらゐ人間に深切なものはない。そしてその深切さは、田舍の人の深切さとは全く種類の違つたものである。都會にはこの自然が缺乏してゐて、その代りに田舍の「人」が入りこんでゐるのである。

一三　祖先を崇び家名を重んず

—冬彦集—

社會學上から上代のわが國家を見れば、いはゆる神祇政治であつた。即ち祭政一致の狀態で、治者は神祇、上も神もひとしくカミであつた。政治は即ち祭祀で、ひとしくマツリゴトであつた。また一方から見れば宗族政治で、宗家が分家を支配したものであつた。公は即ち大家であつたかういふことは強ちわが國に限つたことでは

軋轢
民主主義
畏敬

ない。原始社會にはいくらも類例のあることである。たゞそれが太古から今日まで持續し來つて、立憲政治の今日まで殘つて居るといふことが、甚だ珍しいのである。社會進化論の上に一特例を成したものといつて宜しい。支那の文明を吸收し、印度の教義を採用して、神儒佛合體で國家を治めるといふ聖德太子の方針で、今日までの變遷をなして來たに拘らず、この太古の政體に伴なふところのカミ、オホヤケに對する尊崇心、敬虔の心即ちマゴコロを今日まで少しも失はず、それで何等の爭亂もなく、軋轢もなく、更に西洋の民主主義を入れて、立憲政體を爲し得たといふのが、おもしろいところである。この昔ながらの國體で、今日の世界の間に濶歩して行けるといふのが、わが國民の強みである。

さてこの神祇政治、宗族政治の根本となつて居るものは、いふまでもなく祖先崇拜であつて、祖先の功業を尊崇してこれを畏敬し、

仰慕
神話
繼承

これを仰慕する念がなければ、もとよりこのやうな政體の成立つ所以がない。神話の神々は、一方に於ては自然現象を代表されると同時に、一方では祖先の大功業者たる人々と一致されたのである。天照大神は日神、月讀命は月神、素戔嗚神は恐らくは嵐の神であらうが、これと同時に、わが民族の中で、殊に優れた尊むべき方々であつたに相違ない。かういふ祖先の人々を祭つてお祭をするといふこと、即ち共同の祖先を崇奉して、そこに一致團結の政治が行はれるといふことが、神祇政治、宗族政治の本體である。天照大神が八咫鏡を天孫に下されて、「これを視ること吾を見るが如くせよ。」と仰せられたのは、祖先崇拜といふことを明らかにされたのである。即ち三種の神器をおうけ傳へになつたお方が、祖先の正統、政治上の元首で、いはゆるカミで、かつオホヤケであるのである。それであるから、皇位の繼承には、三種の神器が最も大切なものになつて居る。語

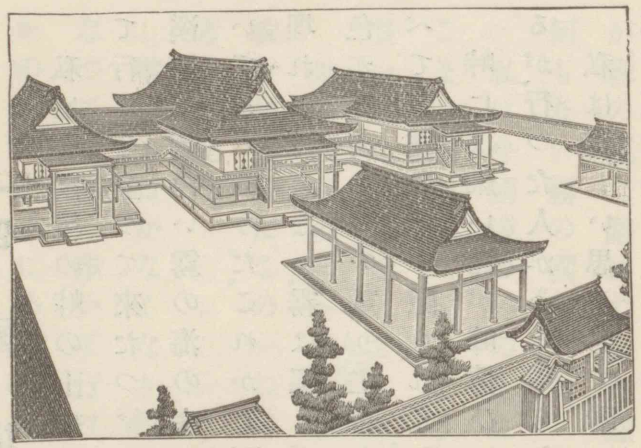
を換へていへば、わが國體上からは、どうしても祖先崇拜といふことを忘れてはならぬのである。

祖先崇拜は支那人にもあるが、支那などの革命の國では、これが國家と結びついてはなんの意味をもなさぬ。ローマやギリシャにもあつたが、今は跡方もない。日本では昔の神祇政治、宗族政治の政體が今日まで連續して居るから、祖廟を尊みこれを祭ることは、大昔から今日まで、政治とは離れられぬ關係をもつて居る。神武天皇が御即位式に神籬(ひもろぎ)を鳥見山(一)に作つて祖宗をお祭りなされたのは即ちこれが爲である。今日でも毎年一月四日の政始には「先奏(スム)伊勢神宮之事」といふことがあるが、これは大寶令(二)時代からの定まりで、これを以て單に昔からの習慣と見るのは間違である。今日でも國家的意味のあることである。宣戰講和の詔勅を發し給ふ時に、神宮にお告げになるのも、その意味からである。宮中に賢所があつて、海

神籬
(一)大和の磯城郡外山(とび)であるといふ。
(二)文武天皇の時定められた。

宣戰講和

外へ出向く人、または歸朝した人などが、拜謁と同時に參拜を仰せつけられるのも、この政體の上からの意味をもつて居る。日本は神國なり。と昔から人のいふのはこれが爲である。神といつても、後世に發達した各派の神道をいふのではない。全く宗教を離れての問題である。信仰の問題たる宗教の自由といふことには、何等の關係がない。苟も日本の國土に生まれて、日本國の臣民たるものは、カミとオホヤケとに對する眞心から、祖宗の靈を尊むといふ次第に外ならぬのである。太古からの國體に伴なつたことである。



(一)武蔵と甲斐との境。

つゞら折

喘ぐ

一四　國境

河井醉茗

私は今(一)國境の峠の上に立つてゐる。冷たい霧がすうすうと流れて行く。今登つて來たつゞら折の路も、重り重りしてゐた峰も、細い溪流も、皆白い霧の海の底に隱れて、眼の下の杉林の梢がまるで浮いてゐるやうだ。これから下つて行かうと思ふ方角も、まるで霧に埋れて見えない。霧は絶えず動いてゐるから、その絶間絶間に青い色が見える。峰の重り工合も、盆地の廣さも、遠い名のある山脈も、すべてが霧の下に隱されてゐる。

峠には細い路が峰傳ひに右へも左へも行けることを示してゐるが、行つた人があるやらないやら、わからないやうな心細い路だ。

私は苦しい思をして、暗い林の間を喘ぎ喘ぎ登つて來た。そして、林が切れて急に明るくなつたと思ふと、もう二三間で峠の頂上だ

つた。私は駈上るやうにして峠の頂上に立つた時、知らぬ國の山々が、霧の底に隱れてゐた。隱れてゐたには違ひないが、見た時はたゞ何もない霧の國だつた。

私は今國境の峠の上に立つてゐる。一人で立つてゐる。一人でこゝまで來たのだ。越えようと思ふ國境までは來たのだ、どんなにか長い苦しい思をして。

地平線の彼方へ——私がさう思つて、平野の中央から遠い地平線を見た時に、この一つの山脈を越えるまでの、一歩一歩の歩みを考へて見た。

電車も行かなくなり、汽車も行かなくなり、がた馬車も行かなくなつても、私は歩いて行ける。ここからはどうしても見えない國が、かの山の向ふにある。どんなに長くても、苦しくても、見えない國の見える所まで行けたら仕合だ。斷切られてゐる地平線の彼方は、な

ほ見たい。機械の力が運んでくれなくなれば、私自身の力で私を運ぶより外はない。是非歩けるだけ歩いて、私の力を試して見たい。私は急がない。無理もしない。たゞどんなことがあつても、あの山の向ふへ越えて見たい。知らぬ國へ越えて見たい。

私は貧惜や勝氣で蹂躙して行かうとは思はない。私を通してくれる一つの橋、一つの岩、一つの木にも、それぞれ親愛を捧げて行かう。山が私を通さないなら、私は通られさうな路を求める。岩が尖つてゐて私を傷つけさうなら、私は岩にすがつて行く。笹の根が私の足を止めるなら、私は仲よく放して行かう。私は山に從順だ。思ひ入つた山にはなほさら從順だ。自信を抱いて登つて行くのに恐れることはない。

地平線の彼方にはまた地平線があり、その向ふにもまた地平線があり、私たちの眼から地平線の離れることはない。地平線の彼方

蹂躙す

には、どういふことがあるだらうか、誰にもわかつてゐないのだ。すべてが新しい發見。すべてが新しい世界。跳躍の國境。私は平野の中央に立つて、地平線の彼方を想ふと、國境の山を想ひ、國境の川を想ふ。

その初め國境といふものは誰が定めたか知らぬが、大抵自然の境界がついてゐる。大きな山脈が長く續いてゐるとか、廣い河が流れてゐるとか、自ら國境らしい圍みがある。就中、國境の峠ほど、地平線の彼方にあこがれて來たものに、緊張と感動とを與へるものはない。

私は今國境の峠の上に立つてゐる。

私は深い山を分登つて來た。山にかゝつてからどんなに長く歩いたらう。山は少しも私の行く路を妨げなかつたけれど、思つたよりも山の路は長かつた。一つの山を廻るとまた一つまた一つと、幾

つ山の裾を廻つたかわからない。もうこれで行きづまりか、もう峠にかゝるのかと思つても、なかなか山は急に迫らない。少しづつ、少しづつ溪間が狹まつて、その長い間沿うて來た溪流が細く細くなつて、最初の水の落ちる所まで來た時には、或人の一生涯を聞終つたやうにほつとした。もう溪流を失ふほどに山は切つ立てになつて、やつと峠に登り着いたのだ。

この峠も人の通らないことはないだらう。一日に一人か二人しか通らないらしい峠だから、けふも一人の人にも逢はなかつたのは、不思議でもなんでもない。可なり奥深くまで人里はあつたけれど、それよりもまた奥深く、人里は絶えてしまつた。日に一人二人、時としては一人の人にも踏まれないで、たゞ草に被はれてゐる樵徑を探り探り登つて來たのだ、向ふには必ず國のあることを信じて——。

羽化登仙體驗

今私は國境の峠に立つて、知らなかつた國を始めて見た。知らなかつた國は、たゞむくむくと白い霧が動いてゐるばかりだ。何もない。私は霧の國を見に來たのだらうか。

私が見ようと思つたのは、かの霧だつたかも知れない。色があつて色がない、形があつて形がない、はてがあつてはてがない、深さも廣さも、すべてが一瞬間も固體にすることができない、捉へることのできない、思ふがまゝに動いて、往くとも、くるとも、進むとも、退くとも、どうともきめることのできない霧が、私の見ようと思つた知らない國の最初の印象として、私の眼に映つた。想像にゐがいてゐた山、川、里、木立、湖沼、人間、更に遠い地平線、それ等の一切の現象よりも、霧は更に自由であつた。

支那人の使ふ羽化登仙といふ文字は、おもしろい文字だ。峠に立つたものは、始めてこの文字の意味を體驗するだらう。こんな小さ

い一個の人間は、わけもなく空中に飛んでしまひさうだ。霧のやうに輕く浮上つて、どこかへ失はれさうだ。脅威し、威壓するやうな山でも、また霧にはかなはないで、わけもなく包まれてしまふ。私も包まれてゐる。このまゝ持つて行かれるかも知れない。登る所まで登りつめた。登れない境にまだ霧が遊んでゐる。盛に誘はうとしてゐる。そこは天と地との間であつて、國の境でも、地の境でもない。

地平線の彼方へ――とばかり思つてゐた私は、地平線にのみとらはれてゐたのだ。私はもう地平線のことを忘れてもよい。忘れてさうして、國境の峠の上に立つてゐると、霧の絶間から見える大地の、いかに渺茫として廣いことであらう。天空のいかに蒼々として高いことであらう。國に境界はあつても、大自然には境界がない。見よ、霧は自由に境界のない大空に動いてゐる。

私は國境を忘れた。霧の中を降つて行つて人里へ出るのを忘れてしまつた。霧の下にはまた新しい國もあり、里もあり、家もあり、人もあるに違ひない。そして、私も降りて行くに違ひないが、今は私の降りて行く國を見ようとしても見られない霧の裡に立つてゐる。

國境よ。國境の峠の霧よ。私は汝に感謝する。私はまだここに立つてゐるであらう。

一五　伊勢志摩の海

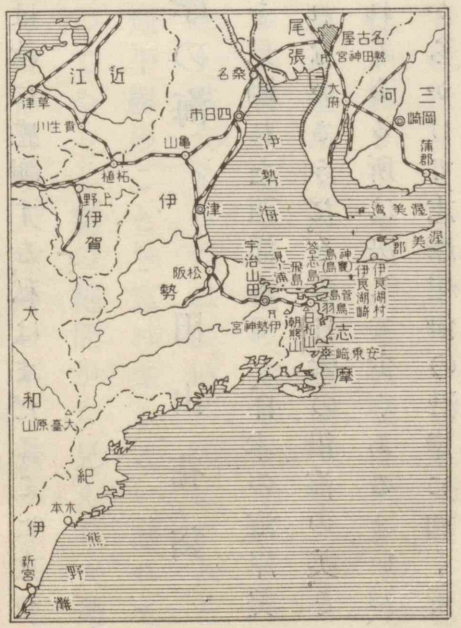
田山花袋

南歐の風光、地中海の大觀を見馴れた西洋人でも、日本の海岸美には一驚を喫せずにはゐられないさうだ。その日本の沿海の美、その美の最も遺憾なく發揮されてある所は決して少くあるまいが、自分の見た中では、伊勢の海からかけて志摩紀伊の沿岸に如く所はない。優美に傾かず、凄涼に過ぎず、さりとて甚だ平凡に陷らず、港灣相接し、島嶼相連なり、斷江、荒磯、漁村、蜑戸、燈臺もあれば松原もあ

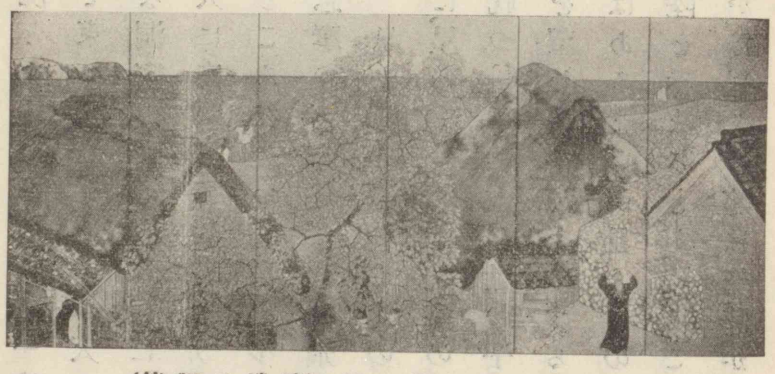
る。海水が深く陸に入つて、恰も溪流のやうな入江をなすかと思へば、月光が閃々として千里の海上を照らし、斜にそばだつた一帆の片影の遠く雲外に消える光景など、殆ど應接に暇がないといつてもよい。

（歓）

伊勢志摩の海。いかに變化に富み、明暗に富み、空想に富んでゐることだらう。自分は嘗て三河國の最南端渥美郡の一角、伊良湖村の絶端なる古山といふ山の上に立つて、一眸の下に伊勢志摩の海を見わたしたことがあつた。夏だつたが、日は一時間ほど前に、遠く向ふにうちわたされた伊勢朝熊連山の陰に落ちて、一時美しく西の空を彩つ



（一）伊勢、志摩の國境。



（渡邊公觀筆）

てゐた種々な形や種々な色のおもしろい夕べの雲も、いつ消え行くともなく消えはてて、もう薄闇い夕暮の光が、どこともなく暗碧な波の上に寄せてゐた。

志摩の海の見わたす限り舟といふ舟、帆といふ帆は殘らず影を隱して、たゞ海のところどころに白く碎ける波の頭が見えるばかりで、その寂しさといつたらなかつた。左の方に、海上一里許を隔てて神島が見える。ちやうど甕を倒にしたやうなので、一名甕島ともいふさうだが、この島は行つて見ると、なかなか風情に富んでゐる。西の山陰に五六十戸の漁村。そこには桂光

院といふ寺。その寺の一室を借りた村役場。それからその島を廻つて東へ行くと、怒濤が天を呑まうとするやうな絶海に臨んで、絶大な洞窟の奇觀。滿潮毎にその中に呑吐する海水の響は、恰も巨人が天に向かつて叫ぶやうで、その壯觀はとても都人士の想像し得るところでない。神島の少し右方に當つて黑い黑い大島の影、それは志摩の答志島だ。菅島、飛島、その他、無數な大島、小島。

日は漸く暮れて、海の色は愈、黑く、その上に浮かぶ島の影も微かに、星のまたゝき、遠海のさゝやき、遠山の姿、自分は深い深い空想に耽つた。平和。人の世の平和とは抑、なんぞや。自分はかう叫んだ。平和を望む心、平和を欲する念、遂にこれ己の弱きを表白してゐるのではあるまいか。見よ、この自然を。見よ、この大觀を。海は四方から來て陸を呑まうとし、陸はこれを拒ぐべく全力を盡してゐるではないか。島。岩。これ等は皆陸が海の怒濤を拒がんが爲に布置した前衛で

孤城落日

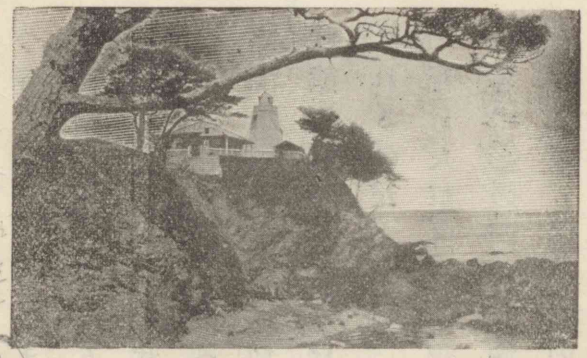
恍惚

はあるまいか。けれども、海の力は時の永久な力を借りて、次第に陸を侵蝕し、島を崩し、岩を碎き、岸を陷れて、次第に陸の運命を縮めつつあるのではあるまいか。

「戰鬪」と自分は叫んだ。實際この伊勢の海の大觀に接すると、誰でも戰鬪といふ感を起さずにはゐられまい。島と、陸と、波と、山とが、いかにも互に刄を交へてゐるやうに配置されて、伊勢の內海はまるで海水に攻落されたやうな狀態に陷りつゝ、なほ陸の爲に節を守つて奮鬪してゐるやうに思はれるのだ。

若し人が、自分の空想に耽つたやうに、その古山の一角に立つて、薄暮の影の四方に滿ちわたるのも知らずにゐたならば、千鳥の寂しげに鳴く聲が、歌のやうにその耳を掠めるので、覺えずその恍惚から覺めるだらう。その時は、影の低いばらばら松の間を過ぎて、外

海に面した荒磯の方へとたどり行くがよい。そして、松原を出てしまつたならば、足を留めて、神島と、その向ふに遠く微かに連なりわたる志摩の山脈との間を見るがよい。月の夜には、その明らかな光に紛れて、それと分明に見出すことはできないかも知れないが、闇の夜には、もの凄い波の上に、大凡一分間くらゐづつ間を隔てて、線香花火のやうにぴかつと光つて、そして、すぐ消えるものがあるだらう。それは何か。(一)燈明崎――志摩國安乘(あのり)の廻轉燈の光である。



安乘の燈臺

あゝ、この詩趣ある燈臺、自分は殆ど想像するにも堪へないのだ。絶海の畔、漁村を距ること數町、磯馴松が風に吹かれて、皆おもしろく斜によれてゐる半島(一)の絶端、懸崖千丈、暴風雨の荒れる夜などは、怒濤の響、松の響、海の鳴る響、風雨の吼える響、殆どその凄じい力に、吹飛ばされてしまひはせぬかと疑はれるばかりのその燈臺に、若い空想がちな青年でなければ、年老いて世の荒波に漂ひはてた老爺、それが靜かに、穩かに、世の中ではとても見ることのできない悠揚たる態度で、海に惱む船人の爲に、その夜毎の勤を怠らない寂しい生活をしてゐる。どんなに空想に乏しい人でも、これを見ては、さまざまな想像を起さずにはゐられまい。

――花袋紀行集――

(一)志摩郡安乘崎。

(一)志摩半島。

一六　春の歌、夏の歌

在原元方(一)

かすみたつ春の山邊は遠けれど
吹きくる風は花の香ぞする

(一)業平の孫。醍醐、村上両天皇頃の人。

さくら狩雨はふり來ぬ同じくは　よみ人知らず
　ぬるとも花のかげに隱れん

かぜふけば波のあや織る池水に　源雅兼(一)
　緣ひきそふる岸のあをやぎ

なつの夜のふすかとすれば時鳥　紀貫之
　なく一聲にあくるしのゝめ

うちしめりあやめぞかをる時鳥　藤原良經(二)
　鳴くやさつきの雨の夕ぐれ

源俊頼(三)

(一)康治二年（一八〇三年）歿。年六十五。

(二)太政大臣。後京極と稱する。建永元年（一八六六年）歿。年三十八。

(三)堀河、鳥羽、崇德の三朝に仕へた。

かぜふけば蓮の浮葉に玉越えて
　涼しくなりぬ日ぐらしの聲　藤原公經(一)

つゆすがる庭の玉笹うちなびき
　一むらすぎぬゆふだちの雲

一七　蘇州城内(二)

芥川龍之介

孔子廟へ來たのは日暮方だつた。疲れた驢馬に跨がりながら、敷石の間に草の生えた廟前の路へさしかゝると、寂しい路端の桑畑の上に、薄白い瑞光寺の廢塔が見える。塔の一層一層に、つたかづらや草の茂つたのも見える。その空に點々と飛違ふこの邊に多い鵲も見える。私は實際この瞬間、蒼茫萬古の意とでも形容したい、哀にもうれしい心持になつた。

(一)從一位太政大臣。寛元二年（一九〇四年）歿。年七十四。

(二)支那江蘇省の首府。揚子江の南方、太湖の邊にある。上海を距る二十八里。もと吳王闔閭の都した所。

この蒼茫萬古の意は、幸にずつと裏切られなかつた。門外に驢馬を乘捨てた後、路もおぼつかない草の中を行けば、暗い柏や杉の間に、南京藻の浮かんだ池がある。と思ふと、池の縁には赤い筋の帽子の兵卒が一人、蘆や蒲を押分けながら、叉手網で魚をすくつてゐる。ここは明治七年に再建されたとはいふものの、宋の名臣范仲淹(一)が創めた江南第一の文廟である。それを思へばこの荒廢は、直ちに支那の荒廢ではないか。しかし、少くとも遠來の私には、この荒廢があればこそ、懷古の詩興も生ずるのである。私は一體歎けば好いのか、それともまた喜べば好いのか。――さういふ矛盾を感じながら、苔むした石橋を渡つた時、私の口にはいつの間にか、こんな句が微かに謳はれてゐた。「休言竟是人家國。我亦書生好感時。」――但しこの句の作者は私ではない。北京にゐる私の友人である。

黑い禮門を通り過ぎてから、石獅の間を少し歩むと、なんとかい

(一)蘇州吳縣の人。皇祐五年(西暦一〇五三年)歿。年六十四。

蘇州の夏（岡田雪窓筆）

ふ小さい通用門がある。その門をあけてもらふ爲には、青服の門番の主婦に、二十錢銀貨をやらなければならない。が、その貧しさうな主婦が、痘痕のある十許の女の子と一緒に案内に立つところは、哀である。私たちは彼等の後から、毒だみの花だけほの白い、夕濕の敷石を踏んで行つた。敷石の盡きる所には、戟門といふのだらう、大きな門が聳えてゐる。名高い天文圖や、支那全圖の石に刻まれたのもここにあるが、あたりに漂つた薄明りでは、碑面もはつきりとは見ることができない。たゞその門をはいつた所に、太鼓や鐘が

並んでゐる。甚だしいかな禮樂の衰へたるや。――今考へると滑稽だが、私にはこの埃だらけの古風な樂器を眺めた時、なんだかそんな感慨があつた。

戟門の中の石疊にも、勿論茫々と草が伸びてゐる。石疊の両側には昔の文官試驗場だつたといふ廊下同樣な屋根續きの前に、何本も太い銀杏がある。私たちは門番の親子と一緒に、その石疊のつきあたりにある大成殿の石段を登つた。(一)大成殿は廟の正殿だから、規模もなかなか雄大である。石段の龍、黄色な壁、群青に白く殿名を書いた御筆らしい正面の額――私は殿外を眺めまはした後、薄暗い殿内をのぞいて見た。すると高い天井に、雨でも降るのかと思ふくらゐ、颯々たる音がわたつてゐる。同時に何か異樣な臭が、ぷんと私の鼻を打つた。

「なんです、あれは。」

(一)孔子を祭つた殿堂。

私は早速退却しながら、同行の友をふり返つた。

「蝙蝠ですよ、この天井に巣をくつてゐる。――」

友はにやにや笑つてゐた。見ればなるほど敷瓦の上にも、一面に黑い糞が落ちてゐる。あの羽音を聞いた上、この夥しい糞を見れば、いかに澤山な蝙蝠が梁間の暗闇に飛んでゐるか、想ふだに餘り好い氣味はしない。私は懷古の詩境から、(一)ゴヤの畫境へ突落されたかうなつては蒼茫どころではない。宛然たる怪談の世界である。

「孔子も蝙蝠には閉口でせう。」

「なに、蝠と福とは同音ですから、支那人は蝙蝠を喜ぶものです。」

驢背の客となつた後、私たちはもう夕もやの下りた暗い小道を通りながら、こんなことを話し合つた。蝙蝠は日本でも江戸時代には、氣味が惡いといふよりも、意氣なものだと思はれたらしい。しかし、西洋の影響はいつの間にか、鹽酸のやうに地金の江戸を腐らせ

(一)Goya. 畫家。スペインの人。肖像畫、戰鬪畫にたくみであつた。(西暦一七四六年―一八二八年)

てしまつた。して見れば今後二十年もすると、「蝙蝠も出て來て濱の夕すゞみ。」の歌には、ボードレール(一)の感化があるなどと、述立てる批評家が出るかも知れない。――驢馬はその間も小ばしりに、頸の鈴を鳴らし鳴らし、新綠の匂の漂つた、人氣のない路を急いでゐる。

――支那遊記――

(一)Baudelaire. フランス人。デカダン派の詩人。(西曆一八二一年―一八六七年)

一八　西瓜と蠅

大町桂月

蠅憎し打たんとすれば近寄らず
蚤は蚤取藥にて防ぐべし。蚊は蚊帳にて防ぐべし。蠅を防ぐ法は未だ發明せられず。頭にたかり、足にたかり、顏にたかり、手にたかり、うるさきことはん方なし。

一日横臥して智囊(二)を讀む。その一節にいはく、

「維亭の張小舍、善く盜を察す。嘗て暑中に於て一古廟の中に遊ぶ。

(二)支那明代の人馮夢龍の著。

鼾睡　劈開

三四輩あり、地に席して鼾睡す。傍に西瓜あり、劈開して未だ食はず。張小舍指さして、盜となしてこれを擒ふ。果して然り。或人その術をたゝく。答へていはく、『古廟に群睡せるは、夜勞して晝疲るゝなり。西瓜を劈いて食はざるは、蠅を避くるなり。』

となるほど、夏日田舍道を行くに、食殘しの西瓜に蠅の集れるは屢見るところなりとて、農家より西瓜を買來らしめ、これを劈いて身邊に置くに、蠅は一向これに集らず。「これはどうしたことか。」と考ふるまでもなし。下種の後智慧よめたり、よめたり。食物の氣なき廟畔の地面にてこそ、蠅は西瓜にたかれ、食物の氣多き室内にては、蠅が冷たき西瓜に飛付くものに非ず。これはばかな眞似をしたものかな。」と自ら笑ふ。思慮を經ずして妄りに書物にあることを實行せんとすれば、とんでもなき間違が起るべしとて、記して自ら戒むるものなり。

――桂月全集――

この一篇は、已の分に安んぜずに、不相應な慾望を起すのを戒めたのである。

(一)名は康治。詩人。神奈川縣の人。明治三十年生。

草いきれ　むしあつい草のにほひ。

汲々　いつしようけんめいになること。

自修文

一九　蟻と地上

井上康文(一)

太陽は燒きつくやうに輝いてゐた。地面は白く乾いて、草や樹木は喘いでゐた。その時蟻は巣から出た。むつとした草いきれが彼の身體を包み、太陽がその小さい身體を燒きこがしてしまふやうに照りつけた。

蟻は巣を出る時に考へてゐた、この草深い田舍で、毎日毎日あくせく餌を漁るに汲々としてゐる自分の愚かさを。どこか自分の知らない所に、ちがつた世界が、もつとすばらしい世界があるに違ひないと。

そこで彼は巣を出たのだ。大きな憧憬をもつて、それが自分をより美しい世界に導くだらうと思つて、彼は歩きだした。元氣よく、快活に、草の葉を越え、土の塊を飛越え、土の盛上つた大きな山を乘越えた。そこで彼は、自分の仲間たちが、曾て自分が働いたやうに懸命に、あくせくと働いてゐるのに出會つた。彼等はお互に頭を突合はせた。そして、お辭儀をし合つた。彼等は曾ても(恐らくその時も)非常に親しかつたのだ。彼等は左に道を避合つて、永い別をした。一匹は憧憬の國へ、一匹は現實相の中へ。

だが彼は、自分の仲間に別れる時、ちよつと寂しかつた。初はそれよりも喜と、誇と、感激とで一杯であつたが、別れた瞬間、涙ぐましい氣持になつた。それで五六歩戻つた。が、それは地上に輪をゑがいたに過ぎなかつた。彼はまた自分の取つた道を歩き始めた。

或日、二人の旅人が道を急いで來た。そして、汗を拭ひながら、背負つた荷物を下して、太い松の樹の下に休んだ。

「隨分暑いですな。これでは晝間は歩けませんや。」

「ほんとに、東京は九十度からの暑さだといふことです。この邊では田も河も水がかれて、お百姓は大分弱つてゐるやうです。」

「これぢや人間だつてたまりませんや。……時に貴方はどちら

曾ても　もとも。以前も。

現實相　現在の世の中。

行商　品物を持ちあるいて商賣をすること。

へ。」

「わたしは東京へ上りますこの街道をずつと商つて。

「この頃ぢやあ行商も骨が折れませうな。なんでも呉服物は東京の大店がうんと勉強して、どこでも誰でも、やれあすこのでなければいけない、ここのでなければいけないなんていつてゐますからな。」

「さう、ずつと世の中が變つて來ましたな。以前は私たちにも相當な商ができたのですが。なんといつたつて東京でさあ、私たちばかりぢやありませんや。」

蟻はこの對話を聞いた。なんでも、こんな所よりは、すばらしく大きな所のあることがわかつた。どんな所だか知らない。だが、そこへ行けば、こんな所では及ばないものが、うんとあるのだ。それはどんな所だらう。彼の好奇心は昂つた。彼はどんなにしてもその都へ行かうと決心した。

美と善と云々　都會を美と善とのある所と想像し、そして、自分の行先をいかにも光榮のある所とした。

(一) Asphalt.（土瀝青）アスファルトを敷きつめた街道。

路地　家と家との間などのせまい道。

彼は長い街道を歩いてゐた。埃まみれになつて、車や馬の往來を避けながら、旅人と共に都をさして歩いてゐた。彼の頭の中は都會の想像で一杯になつた。彼は美と善とをもつて、都會の想像を飾つた。そして、自分の行く所を光榮あらしめた。

それから數十日の後、彼は都會の眞只中にあつた。凄じい音をたてて、自動車や電車が行交つた。人間が絶間なく飛歩いてゐた。そこには敷きつめたアスファルトの街道が走つてゐた。路傍には一本の草の葉さへも見られなかつた。金や銀の金屬がまぶしいやうに光つて、人間がそれを奪ひ合つてゐたが彼の食物はなかつた。輝いた金も銀も、彼には食物ではないと思はれた。そんなものがおれになんの役に立つのだ。彼は憤を感じた。街の家は軒を並べて群立してゐた。そこから汚れた息が吐出されて、空に流れた。人間の顔は青く、生白かつた。赤銅色の素つ裸な人間は一人もゐなかつた。そして、暑さはどこの路地にもはいりこんでゐ

おづおづしながら　びくびくしながら。

護謨の輪　ここでは自動車の車の輪をいふ。

た。

「暑い。暑い。」といひながら、綺麗に裝つて、人間はどこにも出歩いてゐた。

彼は眼が廻りさうになつた。「こんな所に自分等の食物があるのだらうか。」心配でならなかつた。

彼はおづおづしながら、少し歩いて見た。すると自分と同じやうに、恐れ戰いてゐる一匹の蟻に出逢つた。彼も顏を眞靑にして、ふるへてゐた。

ぐうんと地響を立てて、太い護謨の輪が彼のそばを走つて行つた。身體がすくんで、歩けさうにもなかつた。彼はそれでも血眼になつて、食糧を探し始めた。だが一切の蟲の羽さへなかつた。夜になると、家の中を飛出してくる人間で、街道が埋るやうになつた。濁つた光が道を照らした。彼はじつと身を縮めて、時の過ぎるのを待つた。

(一) Cafe. コーヒー店。

(二) Veranda. えんがは。

觸感　ふれた感じ。

そのうち物音が靜かになり、人通が絶えて來た。電車が走らなくなつて、時々自動車がすばらしい勢でかけぬける外、靜かになつて行つた。彼はそろそろ歩きだした。「こんな所はとても堪らない。ぐづぐづしてゐると命がない。」彼は街に面した或カフェーの壁を攀登り始めた。そして、三階のベランダに上つた。ベランダには一つの鉢が置いてあつて、護謨の木が植ゑてあつた。彼はその鉢の土の上で足をぐつと伸した。救はれた、救はれたと思つた。懷かしい、快い土の觸感が身に迫つた。木の匂が身體に浸みこんで來た。だが、田舍の草の根に巢をもつてゐた時ほど、自分の活動の場所が廣くないのが悲しかつた。

夜の露や夏蟲の鳴聲が、彼を慰めてくれなくなつた。靑い空もめつたに見ることができないし、狂ひ廻つて探しても、一匹の蟲を見つけるのは容易ではなくなつた。

彼はそれから、カフェーのベランダに置かれた護謨の木の下

に巣を造つた。世の中は騒々しいばかりで、彼には毎日退屈な日が續いてゐた。

——井上康文詩集——

二〇　佛法僧

高濱虚子

雨月物語を見た人は、高野山といへば、まづ佛法僧鳥のことを思ひ浮かべるであらう。この鳥は日本國中二三の名山にしか居らぬ鳥で、中にも高野の奥の院に啼くのが特に名高い。弘法大師の詩に、

閑林獨坐草堂曉。　三寶之聲聞一鳥。
一鳥有聲人有心。　聲心雲水俱了々。

とあるやうに、その啼聲が「ぶつぽふそう。」と聞えるさうで、法の御山にふさはしい靈鳥として、特にもてはやされてゐる。秀吉の歌といふに、

傳へにし鳥も御法をおこなひの

(一)鳩に似てゐる。羽毛は綠色。別名三寶鳥。
(二)上田秋成の著書。安永五年出版。

法の御山

こゝは高野にありあけの月とかいふのがある。公卿、僧侶の歌はもとより澤山ある。中にも上田秋成はこの鳥に豐臣秀次の幽靈を配して、雨月物語の一章としてゐる。その物語は趣味ある文字として、嘗て愛唱したことがあつた。

今夜愈未央君と共に奥の院へ行つて、佛法僧の啼聲を聞いて來ようと、小僧から提燈を借りて、表に出る。表は暗い。星はあるが、僅かに寺の白い土塀と道との區別がつくくらゐだ。提燈をたよりにその白い土塀に沿うて、表通の奥の院道に出る。

門前の珠數屋も、もう戸を下してゐる。一の橋を渡ると眞暗な杉木立になる。亭々として天を摩するやうな大木が、襖の如く連なつてゐる。その左右を襖でたて切つた中に、帶のやうに幅の狹い空が見える。その空には星が光つてゐる。平生見る星よりは形が大きい。しかもその一帶の星の光では、我等の行手を照らすに足らぬ。我等

(一)德川中世の文學者。文化七年(一四七〇)歿。年七十八。
(二)秀吉の異父妹の子。非行で文祿四年(二五五年)高野山に放たれ、そこで死を賜はつた。年二十七。

高野山の夏　　川村曼舟筆

泡を食ふ

は提燈の光で纔かに足下を探つて歩く。晝間は氣が附かなかつたが、縱横に道を横ぎつてゐる木の根の夥しいのに驚かれる。その木の根は、左右に延びるに隨つて隆起して、終に杉の大木に集つてゐる。末央君は提燈を差上げて、その杉の幹に推しつけるやうにして歩く。末央君が三間許歩いても、まだ杉の半面を照らし盡さぬ。夜の杉は、大きさのわからぬ巨人の如く突つ立つてゐるのである。

寢鳥の立つ音がする。見ると、提燈の上から圓筒の如く圓い光が空に射出されて、それが高い高い杉の梢をうろついてゐる。寢鳥が泡を食ふのも尤もだ。

歩きながら末央君に雨月物語の話をする。墓原の中に裸火らしい火が二つ點つてゐる。どこやら心細くなる。かういふ時に、野ぶすまが道を塞ぐのだらうと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のずつと奥に、うすぼんやりと明るいものが見える。なんであら

一燈園

うかと氣にしながら行くと、突然木の間に空が見えて、そこに鎌のやうな三日月がかゝつてゐる。

向ふからふらふらと提燈が一つくる。急に見えなくなるのは、杉の木に隠れるのであらう。すぐまた現れる。近づいて見ると一人の老僧だ。すれちがひさまによく見ると、「釣狐」の狂言に出る白藏主に似てゐる。

行手に燈籠らしい灯が三つ點つてゐる。近寄つて見ると御廟(一)の橋だ。未央君が橋の上から提燈をつり下げて、水面を照らして見る。玉川(二)の水は火を受けて、ちらちらと流れて居る。燈籠堂(三)はもうすぐそこに在るはずだが、眞暗でそれらしいものは見えぬ。怪しみながら近寄つて見ると、すつかり四周のしとみを下して、寂然として寢靜まつてゐるやうだ。

燈籠堂の裏側の縁に腰をかける。縁に置かれた提燈の灯が、少し

(一)弘法大師の廟。奥院谷に在る。
(二)御廟の側を流れる溪流。
(三)御廟の拜堂。

殺氣

離れて心細さうにまたゝいてゐる。遠方で鉦を叩くやうな音が聞える。法隆寺の境内ででも聞えさうなよい音だ。方角は御廟の後に當る。そんな方に寺はないはずだが、不思議だと思ふ。その鉦の音に聽きほれてゐると、忽ち近い木の梢で、けたゝましい啼聲が起る。なんでも朽木を引裂くやうな殺氣を帶びた聲だ。或は天狗のやうな嘴をした、鬼のやうな手をした鳥で、忽ち空中から落下し來つて、提燈をさらつて行くやうなことはあるまいかと氣になる。氣のせいか、提燈の火は一層心細く瞬いて居る。

小さい咳拂が聞える。「おや。」と思ふうち、また一つ聞える。そのあたりに目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子に、ちよつとした明りがある。ここは晝間線香などを賣つてゐた所であるから、直ちに番人の部屋と想像がつく。試にその傍に行つて、「もしもし。」と呼んで見る。「へい。」と返事をする。「ちよつと伺ひますが、あの恐しい啼聲をする

（鵬）

鳥はなんといふ鳥ですか。」と聞く。「あれは鳥ぢやない。獸です。」といふ。「へえゝ、なんといふ獸です。」と聞くと、「野ぶすまというて、蝙蝠のやうな、いたちのやうな妙な恰好をした獸です。」といふ。あれが野ぶすまかと合點が行く。「それから遠方で鉦が鳴つてゐるやうですが、あれはどこですか。」と聞く。番人はちよつとだまつてゐたが、「あれは鉦ぢやありません。鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です。」といふ。

佛法僧

鉦の音かと思つてゐたのが、鳥の啼聲であつたのは意外であつた。殊にそれが、それを聞きたさにやつて來た佛法僧であつたのは、愈〻意外であつた。「あれが佛法僧ですか。」といつたまゝ、暫く無言で、二人とも耳を傾けた。やはり「かんかん。かんかん。」と鉦の音のやうな響に聞える。たゞさう思つて耳を澄

ますと、「かん。」と響く前に、「ぶつ。」といふ低い音が聞える。「ぶつ。」と低く響いてから、「かん。」と高いさえた音が響く。つまり、「ぶつかん。ぶつかん。」と啼いてゐるやうに聞える。多くの書物には、文字通り佛法僧と鳴くとあるが、雨月物語には、「佛法」といふ字にわざわざ「ぶつぽん。」と假名が振つてあつて、「ぶつぽん。ぶつぽん。」と啼くと書いてあつたやうに記憶する。實際の啼聲は、「ぶつかん。ぶつかん。」と聞えるが、まづ雨月物語の「ぶつぽん。」に近いやうだ。

妙なもので、初は鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは、まさしく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。初め鉦の音と聞いた時も、嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を聯想したが、これが生物の喉から出る聲だと知つてから、その金鈴の響に潤のあることに氣がつく。番人が「大概夜中の二時か三時頃にならんと啼かんのに、今晩は宵の口から頻りに啼いてゐた。」といふ。さういふうちも、

ものかは

夜陰

荒膽をひしぐ

(一)御廟の橋の東の傍に在る。

絶えず「ぶつかん。ぶつかん。」と聞える。普通の鳥とはよほど違つてゐる。法の御山の靈鳥として耻づかしからぬ不思議な鳥だ。古來幾多の詩歌が、これをもてはやしたのも尤もだ。私は嘗て、高野の山の靈山であることは、奥の院道の杉の大木で證據立てられるといつたことがあるが、否々、杉はものかは獨りこの佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。見ると、緣の端に置かれた提燈の火も、今は靜かに點つてゐる。番人は寂しい燈籠堂の夜陰に、偶話相手を得たので、問ひもせぬのにいろいろ話をする。ふと氣がつくと、佛法僧はいつの間にやら啼かぬやうになつてゐた。たゞ野ぶすまが時々荒膽をひしぐやうな啼聲をする。

歸途につく。御廟の橋にかゝつた時、未央君が「また啼く。」といふ。向ふの墓原を縫ふやうに提燈(一)が一つくる。女が三人に男が一人「南無大師遍照金剛。」と唱へつゝ、水向地藏の前を通る。——十五代將軍——

(一)儒者。初名言道。文章博士。元慶三年(一五三九年)歿。年三十六。
(二)琵琶湖の北部に在る。
(三)平安京の正南門。
(四)菅原道眞。自讃

二一　十訓抄と著聞集

一　都良香

竹生島（西山翠嶂筆）

都良香[1]、竹生島[2]に參りけるに、眺望心にすみて、「三千世界眼前盡。」といふ句を作りて、その末を案じ得ざりければ、靈託宣を下し、「十二因緣心裏空。」と、一句加へ給ひけり。

同じ人羅城門[3]を過ぐとて、「氣霽風梳[4]新柳髮。」と詠じたりければ、樓上に聲ありて、「氷消浪洗舊苔鬚。」とつけたりけり。良香、菅丞相[4]の御前にて、この詩を自讃し申しければ、「下の句は鬼の詞なり。」とぞ仰せられける。（十訓抄）

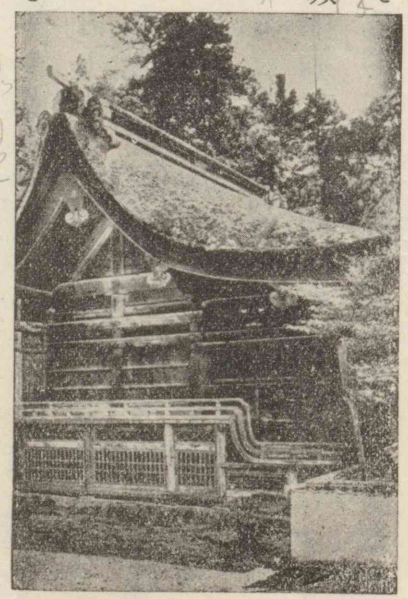
(一)歌僧。後鳥羽天皇頃の人。感應
(二)三島神社。愛媛縣宇摩郡三島町にある。
(三)太宗のこと。貞觀は太宗の年號。

二　能因法師

能因[1]入道、伊豫守實綱に伴なひてかの國に下りたりけるに、夏のはじめ、日久しく照りて、民の歎あさからざりけり。神は和歌に感應し給ふものなり、試に詠みて三島[2]に奉るべき由を、國司頻りに勸めければ、

天の川苗代水にせき下せ天くだりますす神ならば神

と詠みて、みてぐらに書きて社司して申し上げさせければ、炎旱の天俄に曇り渡りて、大いなる雨ふりて、枯れたる稻葉押並べて綠に復りにけり。忽ちに天災を柔ぐること、唐[3]の貞觀の帝の蝗を呑めりける故事にも劣らざりけり。

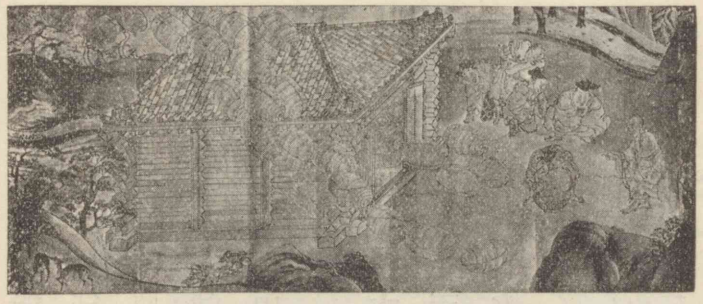


伊豫三島神社

(一)福島縣西白河郡古關村。
念なし
披露す
(二)名は覺猶。戲畫の名手。延六年(一〇八〇年)寂。八十八。
(三)京都市東三條森の北三町にあつたが、應仁以後亡びた。白河天皇の建立。

この入道は至れるすきものにてありければ、都をば霞とともにたちしかど　あきかぜぞふく白河の關

と詠めるを、都にありながらこの歌を出さんこと念なしと思ひて人にも知らせず久しく籠りゐて、色を黑く日にあたりなして後、陸奥國のかたへ修行のついでに詠みたりとぞ披露しける。(古今著聞集)



鳥羽僧正筆蹟

三　鳥羽僧正

(二)鳥羽僧正は近き世には並びなき繪かきなり。(三)法勝寺の金堂の扉の繪かきたる人なり。いつほどのことにか、供米不法のことありける時、辻風の吹きたるに米の俵を多く吹揚げたるが、塵灰の如くに空に揚るを、大童子、法師ばら走り散りて、取りとどめんとしたるを、さまざまにおもしろう筆を揮ひて書かれたりけるを、誰かしたりけん、その繪を院(一)御覽じて、御入興ありけり。その心を僧正におたづねありければ、餘りに供米不法に候ひて、實のものは入り候はで、糠のみ入りて輕く候ふ故に、辻風に吹揚げられ候ふを、さりとてはとて、小法師ばらが取りとゞめんとし候ふがをかしう候ふを書きて候。と申されければ、比興のことなりとて、それより供米のさた嚴しくなりて、不法のことなかりけり。(古今著聞集)

(一)福島縣西白河郡古關村。
(二)名は覺猶。戲畫の名手。延六年(一〇八〇年)寂。八十八。
(三)京都市東三條森の北三町にあつたが、應仁以後亡びた。白河天皇の建立。

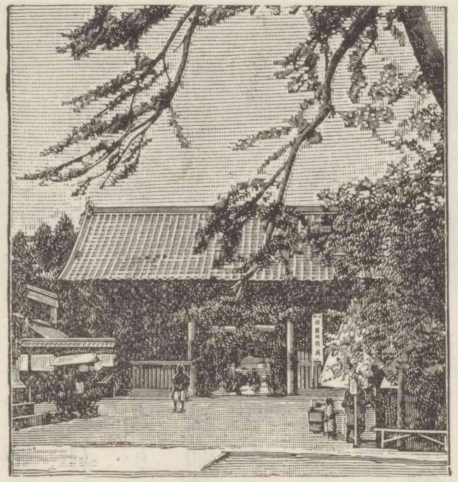
(一)鳥羽法皇。
入興
(二)有名な佛師。後鳥羽、順德兩天皇頃の人。
(三)眞言宗。東京市小石川區音羽町。
下馬評

二二　夢で出會つた運慶　夏目漱石

(二)運慶が(三)護國寺の山門で仁王を刻んでゐるといふ評判だから、散歩ながら行つて見ると、自分より先にもう大勢集つて、頻りに下馬評をやつてゐる。

（甍）うつり合ふ

山門の前五六間の所には、大きな赤松があつて、その幹が斜に山門のいらかを隱して、遠い青空まで伸びてゐる。松の綠と朱塗の門とが互にうつり合つて、見事に見える。その上、松の位置が好い。門の左の端を眼障にならないやうに斜に切つて行つて、上になるほど幅を廣く屋根まで突出してゐるのが、なんとなく古風である。鎌倉時代とも思はれる。



護國寺山門

ところが見てゐるものは、みんな自分と同じく明治の人間である。その中でも車夫が一番多い。辻待をして退屈だから立つてゐるに相違ない。

「大きなもんだなあ。」といつてゐる。

端折る

（繫）委細

「何をこしらへるのだらう。隨分骨が折れさうだなあ。」ともいつてゐる。

さうかと思ふと、「へえ、仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえ、さうかね。わたしやまた仁王はみんな古いのばかりかと思つてゐた。」といつた男もある。

「どうも強さうですね。なんだつてえますぜ、昔から誰が強いつて、仁王ほど強い人あないつていひますぜ。なんでも日本武尊よりも強いんだつてえからね。」と話しかけた男もある。この男は尻を端折つて、帽子も被らずにゐたよほど無教育な男と見える。

運慶は見物人の評判には委細頓着なく、のみと槌とを動かしてゐる。一向振向きもしない。高い所に乘つて、仁王の顏の邊を頻りに彫抜いて行く。

運慶は頭に小さい烏帽子のやうなものを載せて、素袍だかなん

だかわからない大きな袖を、背中にくゝつてゐる。その様子がいかにも古臭い。わいわいいつてゐる見物人とは、まるで釣合が取れないやうである。自分はどうして今時分まで運慶が生きてゐるのかなと思つた。どうも不思議なことがあるものだと考へながら、やはり立つて見てゐた。しかし、運慶の方では、不思議とも奇代ともとんと感じ得ない様子で、一所懸命に彫つてゐる。仰向いてこの態度を眺めてゐた一人の若い男が、自分の方を振向いて、「さすが運慶だな、眼中に我々なしだ。天下の英雄はたゞ仁王と我とあるのみといふ態度だ。あつぱれだ。」といつて賞めだした。

自分はこの言葉をおもしろいと思つた。それでちよつと若い男の方を見ると、若い男はすかさず、「あののみと槌との使方を見給へ。大自在の妙境に達してゐる。」といつた。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫抜いて、のみの歯を竪に

大自在の妙境

運慶作

仁王

返すや否や、斜に上から槌を撃下した。堅い木を一刻みに削つて、厚い木屑が槌の聲に應じて飛んだと思つたら、小鼻のおつ開いた怒鼻の側面が、忽ち浮上つて來た。その刀の入れ方は、いかにも無遠慮であつた。さうして、少しも疑念を挾んで居らんやうに見えた。

「よくあゝ無雜作にのみを使つて、思ふやうな眉や鼻ができるものだなあ。」と、自分はあんまり感心したから、獨言のやうにいつた。するとさつきの若い男が、「な

に、あれは眉や鼻をのみで作るんぢやない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋つてゐるのを、のみと槌との力で掘出すまでだ。まるで土の中から石を掘出すやうなものだから、決して間違ふはずはない。」といつた。

自分はこの時始めて彫刻とはそんなものかと思ひ出した。果してさうなら、誰にでもできることだと思ひ出した。それで急に自分も仁王が彫つて見たくなつたから、見物をやめて、早速家へ歸つた。

道具箱からのみと金槌とを持出して裏へ出て見ると、先達の暴風で倒れた樫を、薪にするつもりで木挽に挽かせた手頃なのが、澤山積んであつた。自分は一番大きいのを選んで、勢よく彫り始めて見たが、不幸にして仁王は見當らなかつた。その次のにも運惡く掘當てることができなかつた。三番目のにも仁王はゐなかつた。自分は積んである薪を片つ端から彫つて見たが、どれもこれも仁王を

藏してゐるのはなかつた。遂に明治の木には到底仁王は埋つてゐないものだと悟つた。それで運慶が今日まで生きてゐる理由もほぼわかつた。

——夢十夜——

二三　「日本だ」

島崎藤村

黒潮

黒潮に乘つて、私は一晝夜に三百二十海里の餘を歸つて來た。故國は今どんな風に變りつゝあるだらう。これからさきどんな風に變つて行くだらう。もう一度自分が故國を見得る日は、どんな風に變つてゐるだらう。かうした想像は、(一)過ぐる三年の間、自分から離れなかつた。若し幸に無事で故國にたどり着くことができたら、日頃親しい人々の恙ない顏を見て、思ふさま國の言葉を話さう、あのことも聞いて見よう、このことも聞いて見ようと、さまざまに思ひ設けて來た。その故國の方へ、私は漸く近づきつゝあつた時だ、私の乘

(一)大正二年に渡歐して大正五年の秋歸朝した。

つて來た汽船熱田丸は、やがて九州の南端に近い海上まで歸つて來た。そこまで歸つてくると、大隅群島の一部が見えるといふ聲を聞いた。「日本だ。」一緒に乘合はせて來た人々は、いづれも甲板に集つて、七月の日に光る海のかなたに、遠く顯れた島々の影を望んだ。シンガポール(一)、香港、上海と寄航するたびに、私たちの熱田丸では內外の乘客を加へたから、その時甲板に集つて、互に歡喜を分つた男女の數は可なりにあつた。しかし、ロンドン出發以來、五十餘日の長い航海の後で、或時は南アフリカのダーバン(二)からシンガポールに到るまで殆ど陸を見ることなしに、每日每日海ばかり眺め暮して來たやうな、さういふごく少數な乘客のみが、眞にその場合の歡喜を分ち合つた。そして、私もまたその一人であつたのだ。恰も日光の渴きを激しく感ずるものが、爭つて日の出を望まうとするやうに、私たちもまた激しい陸の饑から救はれようとした。

(一) Singapore.（新嘉保）マレー半島の南端にある都市。

(二) Durban. 英領南アフリカのナタルの港。

然しかし、これは陸の饑ばかりでもない。私に取つては故國の饑だ。少くとも私の思鄕の念は、あの長期の航海を續ける船乘などの心に似たものであつた。陸の上に倒れ伏し、懷かしい土に吸ひつきたいとさへ思ふといふ船乘の心は、全く自分の同感し得るところであつた。私はこんなことさへ胸にゑがいて歸つて來た。若し上陸して出會ふ最初の日本人があつたなら、知る知らぬに拘らず、その人の側に走り寄らう。でき得ることなら、堅くその人を抱締めよう。そして、自分は遠い國の方から歸つて來たものであるといふその心を告げようと。……實際私は戲れてゐるのではなかつた。それほど人懷かしい心をもつて歸つて來た。

私は熱田丸の甲板の上から、土佐の室戸崎(一)を望んだ。いはゆる「おはな」といふ所だ。二十三年前高知に舊友を訪ねようとして、ひどく波濤に搖られた記憶のある所だ。私はまた紀伊の沿岸を望み、淡路島

(一) 高知縣安藝郡の最南端。

を望んで來た。翠色の滴るやうな日本の島影は、アジヤの他の地方に比べて、どれほどその趣を異にしてゐるか、今度の航海はそれを語つた。

水夫等よ、錨を用意せよ、港は近づいたぞ。七月三日の夜のことであつた。私たちの熱田丸は、客船といふよりも、貨物船といふべきほどで――實際、この戰時に際して、貨物船でない定期船があらうか――イギリスから積んで來た多量な鐵材をはじめ、マレー半島からも、支那からも積んで來た種々な荷物を船庫に滿載しつゝ、豫定の時刻に遲れまいとして、神戸をさして急いで來た。

その時はもう、遠くちらちら燈火が見えた。いかに遲くならうとも、神戸に着くまでは眠るまい、皆起きてゐよう。かう人々は互にいひ合はせた。ほの暗い電燈に照らされる甲板の上には、たゞ上陸を待ちわびる心のみがあつた。私も甲板の欄近く行つて、遠く暗い海

檢疫

のかなたに、點々とした美しい燈火の輝きを望んだ。「あれが神戸だらうか。」「いや、あれは明石だ。」と傍に立つて教へてくれる船員がある。次第にその光は輝きを增して來た。數をも增して來た。かしこにも、ここにもといふやうになつた。闇に隱れた山の容は見えないまでも、高い傾斜らしい所に續く燈火があり、港に滿ちた燈火があり、海岸には海岸らしくそれと知得る燈火の列が、水に接して並び輝くあたりは、そこがもう神戸であつた。

和田岬の燈臺近く私たちの船が到着した頃は、夜の十一時過であつたから、規則通りの檢疫を受ける爲には、翌朝まで待たなければならなかつた。愈一夜は沖合に碇泊することとなつた。海上の闇を縫うて、幾つとなく、燈臺の陰を流れ過ぎる火の鴛鴦のやうなのは、あれは漁に出かける船だと心づくにつけても、漁船を見ることの多い日本近海の魚族の豐富さが思ひやられる。この一夜の碇

泊は、日中の入港にも勝つて、全く好い印象を與へた。假に私が晝日中着いたとしたら、なるほど神戸附近の山々の容はよく見えたらう。海岸の旅館、その他多くの建築物、鐵骨の顯れた船渠などはよく見えたらう。多くの汽船と、帆柱と、煙筒と、旗と、赤く塗られた新造中の船と、その間を動くランチ(一)、日本風の荷船、小舟、はしけなどの、ごちやごちやとした港の光景はよく見えたらう。しかし、さういふ煩はしい細目の外に、何物が私の記憶に殘つたらうか。夜は違ふ。ほんとにそこには何物もないやうで、何もかもあつた。日中に感じ得られたらうと思ふよりは、より以上のものがあつた。星のある七月の空は殆ど水と抱合つて、廣大無邊な暗夜の實在を感知せしめるのは、かういふ晩だ。天涯萬里といふ言葉を、そのまゝ當てはめ得るやうな遠い旅路の末に、東方のはてのはてなる故國の入口へと漸くたどり着いたことを感知せしめるのも、かういふ晩だ。——藤村讀本——

(一) Launch.（艀）

天涯萬里

神戸港

前田荻邨筆

巽 東南。
十六夜の月 陰暦十六日の夜の月。
小波 こまかく立つ波。
繙く 書物をひらいて讀む。
渴 かわくこと。

自修文

二四　をみなへし

生田春月

×

暑かつた日の夜の空は、清らかな碧色に澄んでゐる。

いつか巽の方にのぼる十六夜の月は、匂やかな薄い綠を帶びた鏡のやうに光つてゐる。かうした時である、私は白い蚊帳をつつて、その中に寢ころんで、涼しい夜風の小波を味はふ。そしては愛讀の書を繙いて、靜かに古人の詩を讀む。これが一日の仕事に疲れた心の渴を潤ほす夜露のやうなものである。

蚊帳越しに見える卓の上に、一枚の青葉を丸めたやうな形をした一輪挿が置かれてゐて、それには家のものがきのふ「もうこんなに咲いたのが出ましたのよ、花屋に……」といつて、買つて來て挿してくれたをみなへしが一枝。

すつきりとした直な莖の一節一節から、左右に一枚づつ小莖

さゝやかな　小さい。

が分れて出て、その小莖のさきに、またさゝやかな莖が、もう房のやうに幾つも出てゐて、粟粒のやうなつぼみと花とが、ぷつぷつと宿つてゐる。かうしたをみなへしの姿は、なまめいたといふ感じではなくて、いかにもあつさりとして、かはいらしい純眞さのそれである。

私はをみなへしを見ると、草の丘、若しくは山の裾野、雜木林の中、川の土手、池の邊の叢などをすぐに思ひ浮かべる。またこのをみなへしの根の所でちろちろと啼く蟲のことを思ひ浮かべる。

このさゝやかな一莖のをみなへしは、多分、野原とか、山の裾野とかでこんなに生育つた野生のものではなくして、どこかの花畑で栽培されたそれなのであらう。けれども、土を離れた都會生活に疲れたものにとつては、この花屋のをみなへし、その一莖にも、なほかつ爽かな田園の初秋をしのぶことのできるのが、せめてもの慰めなのである。

山居　山すまひ。

けしき　ありさま。

×

秋はまづ「風より」と昔の人はいつてゐる。

秋來ぬと目にはさやかに見えねども
かぜの音にぞおどろかれぬる

といふ古歌は誰でも知つてゐるが、風によつて秋を知る心は、まだ數知れぬ歌や詩に歌はれてゐる。西行の如きも山居して、

秋たつと人はつげねど知られけり
みやまの裾の風のけしきに

と詠んでゐる。だが、私の感じからは、秋はまづ「草より」といひたい氣がする。

風のけしきを見せるものは、深山の裾の草である。青々と眼もはるに連なつてゐる叢が波のやうに搖れて、さらさらと爽かな聲を送つて行く時、秋のおとづれをその風の音の中に聽取るのである。けれども秋のけしきは、ひとり風の音に聞かれるばかり

ではない、また風の色にも眺められる。稍老いた草の色が微かに風を彩るのである。

太陽が直射して、土地からは熱炎の昇る眞夏の間に、十分に伸びられるだけ伸びきつた野の草、山の草、それがいつか花をもつものは花をもち、實をもつものは實をもつてゐる。そして、その草草の中には、一本の高い高いをみなへしがあつて、その楚々たる綠の莖に黃色な花の小粒をさゝげて、ほのかに風に搖れてゐる。想ひやるさへ懷かしい秋の景色である。秋の色である。

秋は「草より」あらはれる。その草の色、草の戰ぎと共に、人の心にも秋は生まれる。

優しい母の懷にみどり兒の抱かれるやうに、夏の懷に秋は乳を呑む。

×

秋は田舍にゐてもよく、都會にゐてもよい。家にゐてもよく、町

楚々しなやかなさま。

みどり兒赤兒。

を歩いてもよい。寢てゐてもよく、起きてゐてもよい。達者な人にもよく、身體の弱い人にもよい。かういふ風に惠深いものに考へられるのが、秋の季節ではなからうか。

いつの年でも秋のくるのは待遠しい。秋になつたらと、夏の暑さの間ぢゆう、したいと思ふ仕事のこと、旅のことあれこれと想ひ廻らして、待ちに待つてゐるうちに、秋はいつの間にかつい傍に來てゐる。

白い蚊帳の中で、夜の更けるまで心靜かに愛讀の書に親しんでゐる時、どこからかはひこんで來たこほろぎが、その毛のやうな觸角を廻しながら、友だちでもあるかのやうに、私に近づいてくる。なんの不安もなげに、つい私の手許まで入つてくる。この小さい蟲を見ると、近づいてくる秋の相が感じられる。けれども、まだかうした八月の半ばなので、十分發育しきつてゐないし、まだ啼きもしない。みどり兒のやうにはつてゐるばかりだ。寢がへ

小夜曲　よるの音樂。

(一)生田春月著小品集。大正十五年東京新潮社發行。

りのはずみにでも、潰してしまつてはかはいさうだと思つて、そつとつまんで蚊帳の外へ出て、硝子戸の開かれてゐる窓から、すぐ手の屆く、つたの一杯からんでゐる板塀へと放つてやる。

昔浦島の子に救はれた龜は、浦島の子を龍宮へと連れて行つたといふ。私のこの夜のこほろぎは、きつと私の爲に、九月がくれば、かはいらしい小夜曲を唄つてくれるに違ひない。やがて秋が近くなると、こほろぎのはつて行くつたの蔓は伸びるのをやめる。伸びてもその葉はごく小さい。板塀から板塀に、竹垣から竹垣に繁れるだけ繁つたつたが、ほろほろと黄ばんで落ちるのは、十月の末であらう。その時までにできるだけの仕事をして置いて、樂しい秋の日の旅をしたいと私は考へる。をみなへしのそのまの姿で野邊に立つその汽車の窓からの眺さへ、ありありと眼に浮かんで、心はいかばかりそゝられることぞ。—旅ゆく一人—(一)

光年

(一)詩人。東京の人。明治二十五年生。

二五　銀砂滿天

河井醉茗

天上の砂は星である。地上の砂はこぼれやすいが、天上の砂はこぼれない。

深夜の空に金の砂子、銀の砂子をまきちらしたやうな星の數は、地上の砂よりも多いであらう。

恒河の砂は無限であると聞くが、銀河の砂も無限だ。幾光年か知れない星が天に充ち滿ちて、その一粒の砂には、また私たちの住む地上の砂よりも多くの砂を含んでゐるかも知れない。

「私に一々名を呼ばせてくれ、おゝ風に輝く星々よ。」と星の詩人尾崎喜八氏の呼びかけたのは、武藏野の眞中である。(一)

わが砂丘の上に輝く星々の數も、武藏野の眞中の空に輝く星々と同じく數が多い。その悉くの星が今夜現れたかの如く、新鮮な光

輝に輝いてゐる。

都會の空に輝く星の數は極めて少い。空氣が混濁してゐるからだ。原野、山巔、海岸、遠洋、それ等の場所で空の無量海を測るなら、あらゆる星が悅ぶだらう。

宇宙

わが砂丘の上にも宇宙の旅人は無數に廻つてゐるのだ。名を知らないけれど、私もその一つ一つに呼びかけて見たい。

地上の砂には手がとゞくけれど、天上の砂は手に觸れられない。たゞ距離の存在を知るばかりだ。それでも私たちは夜空の美しさを、幾たびか仰向いて見るだらう。

ここに生活するものが仰ぐ星だ。わが砂丘の夜は暗いけれど、星は美しい。美しい夢想を意識したいのも人間の希ひだ。星を忘れてゐるやうな人間は寂しさを知らない。暮れたばかりの都會の一角、赤い灯、青い灯、(一)イルミネーションの色、黃色い霧が立つてゐる。星の

Illumination.
(照明)

輝いてゐることなどは誰も知らない。」と嘗て私の詩にあつた。

—生ける風景—

二六　野菊

前田鐵之助

野菊。野菊。
野菊の花よ。
かつきり晴れわたる秋の日の
黎明に光る星屑のやうな、
愛らしく愛らしく咲く花の群よ。
私はそなたが好きだ。
思はず人が笑みかけて
いたはりたいやうに思ふそなた
が好きだ。

野　菊　（香田勝太筆）

そなたの姿は華やかな
寂しい人の心か。
神に祈る心の深さのやうに、
清らかなこぼれてくる想を映らせ
人の愛撫と善い微笑とを揺する
あゝ、いとけない心の花々よ。
私はそなたの單純な美しさに、
天の泉が胸に注がれるやうな
ひとときの生命に觸れた。
愛らしいいとしい素朴な花々よ。
野菊の花よ。野菊の花よ。

二七　神國の首都

小泉八雲

―日本詩集―

(一)島根縣松江市。

(杵)

勤行

(蕪菁)

小泉八雲

(一)松江で朝の夢を破る最初のもの音は、ちやうど耳底で緩やかな大きな脈が搏つやうに響いてくる米つきの音である。きねの落ちる響が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴なふあらゆる音響の中で、最もあはれに思はれる。米つきの音は、日本といふ國土の脈搏である。

それから禪刹洞光寺の大きな鐘がごうんと響いて、市街の空を撼がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から、太鼓の寂しげな音が、晨の勤行を告げる。最後に行商人のもの賣の聲、「大根やい。かぶや、かぶ。」「薪や薪。」

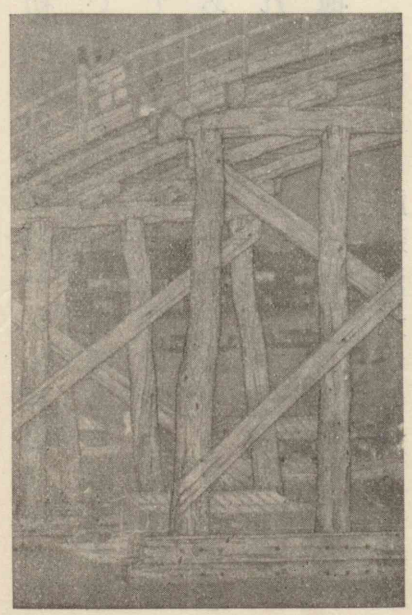
明方のこんなもの音に起されて、私は二階の障子を明けて、河畔の底から伸びた春の若葉の軟かな綠の雲越しに、朝景色を眺めや

(一)松江市を貫流する川。
(二)島根縣八束郡の內海。東西四里、南北一里半。

つた。(一)大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わなゝくやうに萬象を映寫して、微かに光つてゐる。この川は宍道(二)湖に向かつて口を開け、湖は右手へ擴つて、杳乎たる連丘に包まれてゐる。對岸の日本の家屋は戸が皆閉つてゐるので、恰も箱を閉ぢたやうである。夜は明けたが、日がまだ出ない。遙かに見わたすと、薄色の霞が湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲狀をなした長い帶は、日本の昔の繪で見る通りであるが、實際の現象を眺めたことのないものには、畫工が奇をてらつたとしか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、峰から峰へ、はて知らぬ

盡端

奇をてら(衒)ふ



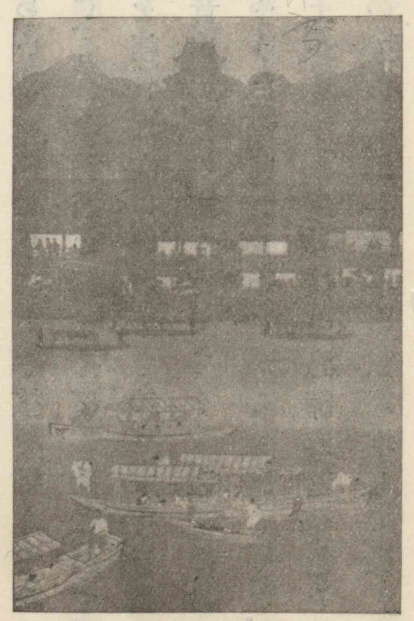
山陰の水郷（平井楳仙筆）その一

長さの紗のやうに、横に延びてゐる。だから湖水は實際より遙かに大きく、昧爽の空の色と入交つた美しい幻の海となつて見える。山々は霧の中に浮かぶ島嶼で、夢のやうな一帶の丘陵は、はてしのない土手道かと怪しまれる。そして、霧が立つに連れて、その趣は徐に變つて行く。朝日の黃色な緣が見えてくると、今までのよりは更に强い、細やかな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水のかなたにある高い建物の木地の色が、美しいもやの色で、蒸氣の立つ黃金色へと變る。

一朝日の方へ向くと、澤山橋げたの並ぶ長い木造の大橋の彼方に、

昧爽

木地(桁)



山陰の水郷（平井楳仙筆）その二

蓬萊の夢

一艘の船が、今しも帆を揚げようとしてゐる。こんな奇妙な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である。霞にぼやけた船の精靈である。しかし、この精靈は雲と同樣、光線を受けて薄青い光の中で、金色に震へてゐる。

庭先の川端から、手を拍つ音が起つてくる。一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えないが、對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿は見える。めいめい帶に小さい手拭を挿んでゐて、顏と手とを洗ひ、口をそゝぐ。これは神道の祈を捧げる前に、必ず行ふ潔齋である。それから顏を朝日に向け、四度手を拍つて拜む。長い橋の上からも、他の拍手の音が反響の如くに出てくる。遠くにある、輕い、優美な、そして、新月のやうに彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異樣な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黃金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が增して、殆ど鋭

潔齋

い音響の連發となつた。それは人々が今皆朝日――お日樣――天照大神を拜んでゐるからである。いとも尊き日の造主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗しくなし給ふことを謝し奉る。」言葉はこの通りでないまでも、これが無數な人々の衷心である。朝日に向かつてだけ手を拍つものもあるが、大概は西の杵築の大社(一)へ向かつてもさうするのである。顏を東西南北へ向けて、群神の名を低聲で唱へるものさへ隨分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山(二)の高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふ藥師如來の大伽藍のある所に向かひ、今度は佛敎の儀式に隨ひ、掌を合はせて、輕く擦るものもある。しかし、日本で最古なこの國では、佛敎徒もまた神道信者であるから、誰も誰も古風な神道の祈の文句を唱へる。拂ひ給へ、淨め給へ、とほ神ゐみため。」

手を拍つ音がやんで、一日の仕事が始り出し、橋の上にはからこ

衷心

(一)杵築町に在る出雲大社。

(二)島根縣簸川郡。松江市の北方約六里。山陰線今市驛から山麓まで輕便鐵道がある。

均整

（楔）

（蹟）

ろといふ下駄の音が、だんだん高く響いてくる。大橋の上で鳴る下駄の音は、忘れられない音である。速くて、陽氣で、音樂的で、盛な舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日のさした橋の上を通る數へきれぬ人の足がちらちらするのは、驚くべき光景である。その足は皆細くて、恰好が均整を得てゐて、ギリシャの古甕にゑがいた人物の足のやうに輕やかで、そして、足を運ぶ時、指を先に下す。實際下駄では外にしやうがない。それは、踵は下駄にも着かねば、地にも着かないし、足はくさび形の木の臺を前へ傾けては進むのであつた。一足の下駄の上に立つだけでも、馴れぬものには困難であるのに、日本の子供は三寸もある臺の下駄を穿いて、親指と他の四本の指とに挾んだ前緒だけで足を固定させて、全速力を出して駈けて行く。それでも、つまづきもせず、また下駄もぬげない。更に珍しいのは、大人が木履で歩く光景である。これは木の臺に高さ五寸もある齒が附いて、全體の構造は、木製の長椅子の漆塗の標本かと思はれる。しかし、それを穿いた人は、まるで足に何もつけてゐないかのやうに、樂々と濶歩する。

やがて學校へ急ぐ子供たちが出てくる。彼等の駈ける時に、綺麗な飛白の着物の濶い袖が波動すると、大きな蝶が羽搏をするやうに見える。親船は白色や黄色の大きな蜚を擴げるし、埠頭の側で眠つてゐた小蒸氣船は、煙突から煙を吐きはじめる。

（一）まだ馴れぬ日本の瞥見

1 "Glimpses of Unfamiliar Japan."

二八　戸隱登山（二）

荻原井泉水

翌朝顏を洗ふとて水に手を入れると、指が切れさうな清水だつた。木で作つた大きな昔風の手洗だらひで。

宿の前に出て見る。そこら一面の露だ。麻畑でも、桑畑でも、叢でも、

（二）長野縣上水内郡。海拔六七一五尺。

藁屋でも、犬でも、馬でも……。

向ふに戸隱に續く西山が見える。戸隱によく似たギッグザッグな峰の連立した山で、ちやうどそこに朝日がさしかけたところだ。屋根が深いひだをなしてゐるので、光の當る表に綠が燃立ち、その裏の谷間が眞黑にくつきりと刻みこまれてゐる美しさ。そのすぐ左に遠く見える白馬嶽(一)の積雪が、ほんのりと薄赤く染まつて行く美しさ。――登山の幸を約束するやうな、すばらしい好晴だ。

きのふ呼んだ案內者が、山國通有な無表情な顏を、少しにこにこさせながらやつて來て、外に立つてゐる私に、「お早うございます。」といふ。雪袴を穿いて、腰に木の鞘にはめた小刀をさして、なんといふか知らぬ、もつこのやうな厚い蓆に紐を附けたものを背にしてゐる。これにけふの握飯や草鞋などをつけて、負うてくれる氣なのだらう。人の好ささうなおやぢだ。

(一)戸隱山の西方約八里。

(春)

そろり、そろりと出かけた。暫くは流に沿うた路にステッキを振りながら、散步でもするやうなゆつたりとした氣持で。露がべつとりと深い。桔梗や野菊は露が重たくて、まぶたが開かれないといふ風をしてゐる。

ゆふべ月を見て立つてゐたあたりには、唐松が疎に生えてゐる。この木の楚々とした高原的な感じは懷かしい。それから先へ行くと、景色が開けて、しらかんばが、あちこちに立つてゐる。をりから朝日が原の上を洪水のやうに漲り寄せて、その華やかな光線が、かばのつややかな木肌にきらきらと反射する。鶯があちらで、またこちらで、好い機嫌に鳴いてゐる。

飯綱(一)山がこんもりとして右手に迫つてゐる。そして、これから登らうとする戸隱が、高く嶮しい姿を以て、ぴつたりと行手に立現れて來た。ちよつと勇み立たれるやうな心持になる。

(白樺)

(一)上水內郡。戸隱山の北東約三里。海拔六三二六尺。

(一)戸隱神社。

幽邃

(一)奥社の入口から十數町、眞直に杉並木が續いてゐる所はすばらしい。この木立の下が坦々として參道になつてゐる。杜鵑がけざやかに鳴く、「ほぞんかけたか。ほぞんかけたか。」と。それから山鳩が「ぼうろん。ぼうろん。」と。「昔はここに十數棟の寺屋敷があつたものだ。」と案内者がいふ。なるほど大きな礎が雜草の中に殘つてゐる。雜草の一つに、ふきのやうな葉で、どの葉もどの葉も蝕んだやうな穴のあいてゐるのがある。なんといふ草だとたづねると、なんといふのがほんたうか知らぬが、俗に、やぶれがさといふと案内者は教へた。

奥社は山の麓にぴつたり沿うた少し高みの所にある。規模は小さいが、幽邃なこと第一である。信州の人はよく戸隱に詣でる。さうした講も多くできてゐるさうだ。それは皆この奥社までくるのである。信心の方はそれで足りる。しかし、戸隱の雄勝を探らうとするには、是非とも裏山を踏まねばならない。これから上には水がない

から……」と案内者がいふので、ここの御手洗に落ちこむ清水を水筒に一杯滿たした。

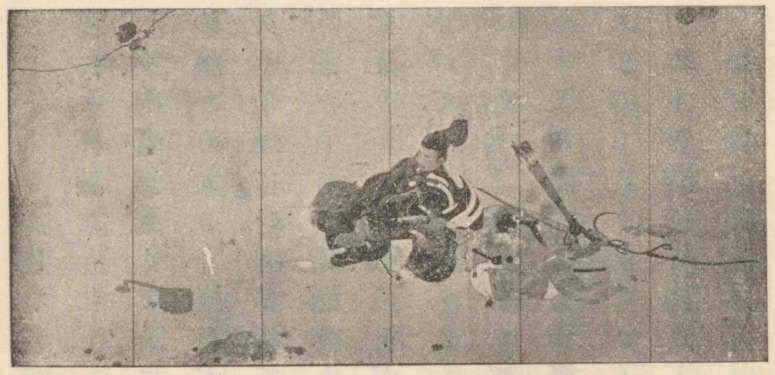
案内者が麾くまゝに、社務所の勝手口のやうな所にはいると、山の腹から大きな巖石が岩戸のやうになつて出つぱつて、この内で焚く炊煙にいぶされて、鐵のやうに眞黑に光つてゐるのに、ちよつと驚かされる。見廻すと、社務所の柱も、天井も、塗立での漆のやうな黑光りがして、漆の汁が今にも滴りさうである。ここに帳面をぶら下げて、

此所ヲ通行サレル方ハカブリ物ヲ御取リ下サイ　社務所

とある。戸隱には天狗樣が澤山ゐて恐しいさうだから、命これ從はねばならぬと豫てから聞いてゐた。帽を脱いで、この黑光りした岩戸の下を潜つて出ると、その裏からすぐに急な上りになる。

路は項上まで殆ど一直線についてゐると見える。それはこの山

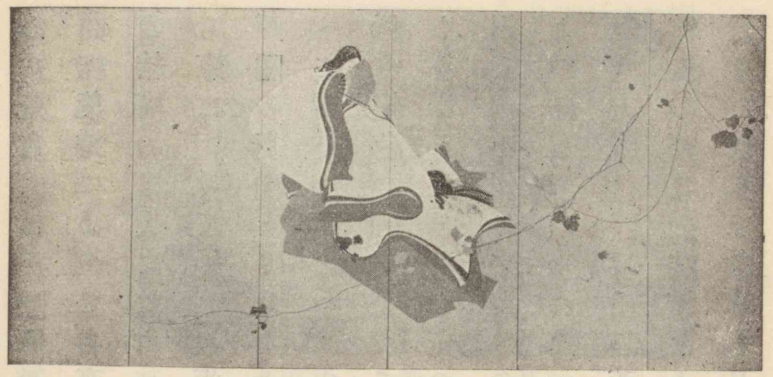
千仞



紅葉狩（小山榮達筆）その一

がきつ立ての谷で深いひだを作つてゐるので、路は谷から渡つて縫ふやうにつけることができず、一つの尾根の背にすがりついて、遮二無二上りきつてしまふより、路のつけ方がないからである。それだけ一歩一歩が、一歩一歩だけ目に見えて眼界を廣く展開する。

蟻のとわたりといふ嶮岨があるとは聞いてゐたが、それは岩石を傳うて移る所で、幅二三尺に足らぬ岩の背が、右も左も文字通りの千仞の絶壁を以て、げそりと直角的に谷になつてゐるのである。そこだけは邊に樹木も少い爲、足元の危さ」



紅葉狩（小山榮達筆）その二

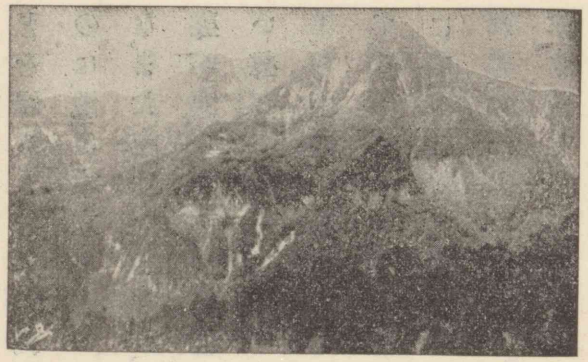
谷の深さが、一層はつきりとそこを通るものの目を脅す。これと似て劒の及渡と稱する難所がまだ一個所ある。霧の深い日や風の強い日などには、むづかしさうである。

そこの試練が濟むと、ぢきに絶頂である。ここの展望臺を八方睨といふ。これも天狗樣の聯想からついた名であらう。いかさま八方遮るものなき景觀である。まづ北に漫々たる日本海が水平に盛上つてゐる。光の受方のせいか、光らずに、薄黑くどんよりと憂鬱な感じをしてゐる。西の方には近く西嶽と荒倉山とが並んで

(一)平維茂。平貞盛の養子。
(二)信濃、越中、飛驒三國の境。
(三)新潟縣中頸城郡。長野縣との境。
(四)上水内郡。新潟縣との境。
(五)上水内郡。戸隱山の北方約一里。
(六)上水内郡。

ゐる。荒倉山は戸隱傳說にある維茂(これもち)が鬼女を退治した所として、謠曲紅葉狩によつて名高い。アルプスの連峰はここから見て更にその結構の雄大に驚かれる中に、白馬(二)の雄姿が愈輝いてゐる。北東から東にかけて妙高(三)、黑姫(四)、高妻(五)、飯綱の群山が峙つてゐる。この高妻は戸隱の奥山とされてゐるもので、きのふ山上の小屋に泊らうと考へてゐた小屋といふのは、高妻の頂上にあるといふことだ。地上に低く銀色に圓く光つてゐるのは野尻湖(六)だ。それから南に寄つて遠くうねうねと白く光つてゐるのは千曲川だ。南には淺間山から上州、武州、甲州にかけての連峰、――おゝ、富士が見える。富士が……によつぽりその紛れない頭をぬき出してゐる。

八方睨は戸隱山の西端である。そこから山の背を傳うて東端に移るのだ。この峰渡は上り下りが少い。ここらにも木立は深いので、行くには樂である。そして、右に左に展ける眺がおもしろいし、吹通す風がすばらしく涼しい。龍の谷、岩戸の谷、大科の谷、白澤、塔の澤、燒の澤などと深い谷や澤が、天然の大きな斧の力を思はせるやうに、ぎつくりと刻みこまれてゐる。その縁邊に沿うて、馬の背のやうな路を行くのだ。


高妻山

木立が深い爲に高山の感じに乏しい。また展望が開けてゐる爲に深山の感じに乏しい。小鳥の數が非常に多い。その中でも鶯は騷々しいほど鳴く。川原ひわがよくさへづる。(一)「一鳥啼かず山更に幽なり。」といふ句があるが、かう鳥が賑やかに鳴くことも、深山といふ感じとは遠い。しかし、谷を見ると、絶壁に沿うて高山植物がびつしり咲いたり、小さいお花畑になつてゐる所もある。そんな所

(一)「茅簷相對坐終日。一鳥不鳴山更幽。」(王安石)

に蝶がひらひらと懸崖にすがりつくやうに飛んでゐる。

天狗の話も聞かされた。この山に來て天狗の不思議を嘲る話などをすると、忽ち天狗の怒に觸れる。今までそよとの風もなかつたのに、俄に木立が嵐のやうにざわめき立つてくることがあるさうな。また夜はをりをり、かんら。かんら。と大きな音で人の笑ふやうな聲がする。それを天狗の高笑といふが、とても人間業ではできぬ高い聲ださうな。

下山路は石がごろごろして、その間に水がぢくぢくと流れてゐて、歩きづらい。蓋し路といふものの、山の雨水のはけ口として自然にできたものを、人が少し踏みひろげたくらゐに過ぎないのだ。けれど、なんといつても下りは早い。殖林したらしい若い木の綠のすがすがしい林があつたり、二三歩に石を飛んで渡るくらゐな幅の川があつたりして——この水源は辨當を食べた清水なのだ——

やがて牧場に出た。ここから今越えて來た戸隱の峰續きが、全體くつきりと仰がれる。八方睨や、黑澤や、釋迦澤なども、一々指摘される。相應に高いなと思ふ。

牧場といふのは村で經營してゐるので、可なりに廣く、實に天成の牧場ともいふべき地勢を利用して、牛や馬を放牧してゐるのだ。馬の一群の遊んでゐるのが遠くに見える。馬が越えないやうに柵をしてある所を拔ける時は、また元の通り柵をして置いて過ぎる。たつた一軒番小屋がある。そこに寄つてお茶をふるまはれた。

けさ中社の宿に置いて來た荷物は、番小屋まで別の使で屆けて置いてもらつたので、それを受取つて、ここで案內者に別れた。柏原(一)まで四里といふ路は、廣い平坦な、それと共に平凡な路だ。二里行つて大橋の茶屋といふのがあるが、暑さうな家なので寄らずに、また一里ほど行つて、馬子たちと一緒によしず茶屋に休んだ。

(一)上水內郡柏原村。

この茶屋に柏原發の汽車の時間表がはつてある。それを見て、六時半の上り列車に間に合ふやうにと歩調を早めた。驛が向ふに見える頃から、黒姫と妙高とが夕日を背にして、鮮かに大きく坐つてゐる姿が、實に美しく顧られたが、今にも向ふに汽車の烟が見えさうな時間が切迫してゐるので、ひた急ぎに急いだ。そして、私たちが停車場に飛びこむのと、汽車が入つてくるのと全く一緒だつた。

――涼味俳味チックタック日記――

(一)東京朝日新聞記者。大正十二年外國から歸り、同年八月信州田澤温泉に遊んだ。
(二)鉦鳴らしながら信濃の國を巡禮して歩いたなら、昔のまゝの健かな母にめぐり會ふことができるだらうか。
(三)窪田空穗。名は通治。國文學者、歌人。長野縣の人。

自修文

二九　子等と共に

原田讓二(一)

鉦鳴らし(二)信濃の國を行きゆかばありしながらの母見るらんか。(空穗(三))

私は信州にはいるたびに、この歌を想ひ出すのである。汽車の窓から野や山を見てゐると、そこに小さい巡禮の姿があらうがあるまいが、うたふやうな、悲しいやうな氣持になつて、口のうちでこの歌を繰返さないではゐられない。私に母がないのではない。母はまだ健かである。幼い時の境遇がさうであつたかといふに、さうでもない。たゞ青年時に讀耽つた詩の記憶が、しめやかに私をして母を懷かしめるのである。むづかしい學科などは忘れてしまつても、詩だけは心の培ひになつて殘つてゐるのだ。

子供等は皆山へ行く。子供等の山を慕ふ心は、大人には測り知れない。そこには山百合や、釣鐘草や、なでしこや、その他名も知れない珍しい草花が彼等を待つてゐる。路端の草むらからは、生まれたばかりのやうな青い小蛙が飛出す。野生の蜜蜂がうなる。赤蜻蛉が目に見えぬ絲で繰られるやうに飛んで行く。草家の軒に枝をのばした柿の實はまだ青い。栗の木の葉陰に隱れた栗の實も、青いいがを鎧つてゐる。かういふものは、東京に生まれた彼等

しめやかに　ものしづかに。

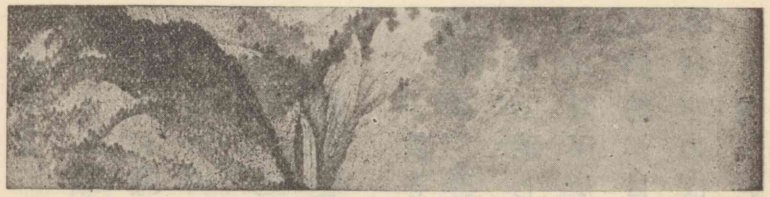
(瞿麥)

草家　草でふいた家。

鎧ふ　着てゐる。鋭くて鎧のやうであるのでいふ。

(一)島崎藤村のこと。藤村は長野縣西筑摩郡馬籠村の生。

殘骸　しがい。

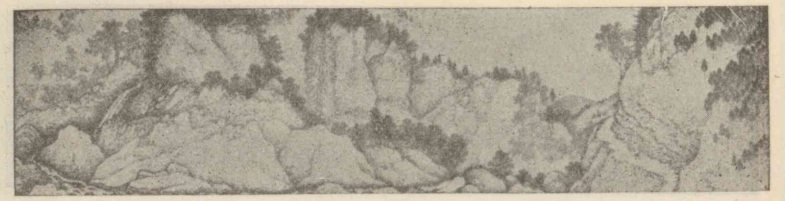


信濃の山路（寺崎廣業筆）その一

には、悉く目新しい未知な世界だ。島崎(一)さんの「ふるさと」といふ書物を携へて來た彼等は、同じ信濃の國へ來て、その書物の中のことを、ありのまゝに味はふやうな氣がしてゐるだらう。

山から歸つてくると、ひとしきり騷がしいことだ。一かゝへもある草花をそこの緣側へ取散らして、標本だの押花だのといつて、妹は姉の眞似をする。中には、百姓に拔いてもらつたといふ長い長い根こそぎの鬼百合もある。草花の生命を土から斷つてしまつたといふやうなことを、彼等は少しも考へない。これほど騷いで置きながら、いつしか忘れてしまふから、朝採つた花は、夕には哀な殘骸となつて、萎れてしまふ。それでまた翌朝は、勇んで花を採りに行く。

祝福　他人の幸福をよろこびねがふこと。



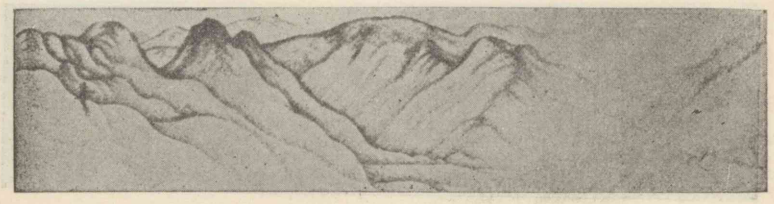
信濃の山路（寺崎廣業筆）その二

ここの山には蛇はゐないといふこと、誰かがきのふ栗鼠を見たこと、同じ宿のお友だちが蜂にさされた話、溪川へ下りて清水を飲んだが、蛙の卵はゐないだらうかとか、そこの小石を動かしたら蟹が出たとか、子供等の山の土產話は盡きない。父親であるところの私は、彼等が汗を拭き拭き先を競うてこれ等のことを報告するのを、一々聞かなければならなかつた。東京にゐて街から歸つた時と、かうして山から歸つて來た時とは、子供の顏がすつかり違つてゐる。そして、その汗までが違ふ。私の胸は子供の健康を祝福する心で一杯である。

子供を山にやつてから、妻は涼しいうちにといつて、よく洗濯に出かけた。この三階にゐて寢そべつたまゝ、私は遠くに妻の洗濯する姿を見ること

かけひ（筧）水を引く爲にかけわたしたとひ。

私はどうだらう　妻はせつかく避暑に來ても、東京にゐる時のやうに毎日働いてゐるのに、自分はなまけてゐると、自分で自分を責めたのである。



信濃の山路（寺崎廣業筆）その三

ができる。宿屋の庭の山に迫つた崖の下で、かけひの水をたらひに受けながら、かの女は働いてゐる。私たちの生活は、場所を移動させたばかりだ。妻はここに來ても、やはり日課を續けてゐる。私はどうだらう。

すぐ目の下に一軒の駐在所がある、恰も寂しいこの温泉場を保護するやうにその家の奥さんは、晝間は子供の守をしながら讀書してゐた、或時は自分の家の縁先で、時にはまた前の農家の廣庭の木蔭で。その庭には繭が干してあつた。鷄が平籠の上に飛上つて、眞白な繭玉を覆したこともあつた。

夕暮になると、主人の警官は、自轉車を押しながら坂路を歸つて來た。私は夜の散歩の時に、駐在所の涼しさうな簾越しに、睦まじさうに晩餐をとる

影繪　あかりで物に大きくうつつた影。

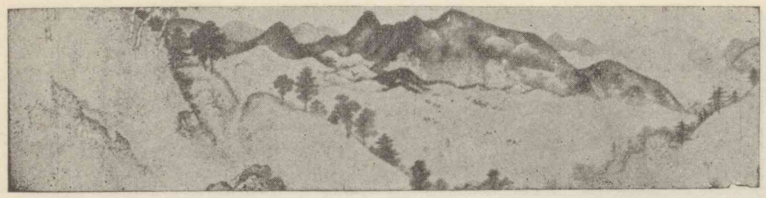
生活の云々　同じやうな生活をしてゐるとの意。

せゝらぎ　瀬の淺い小流。

賦す　詩などを作る。

（一）信濃の人。德川末期の志士。元治元年（一八六四）歿。年五十四。

（二）長野縣小縣郡青木村。海拔二二〇〇尺の山腹にある。



信濃の山路（寺崎廣業筆）その四

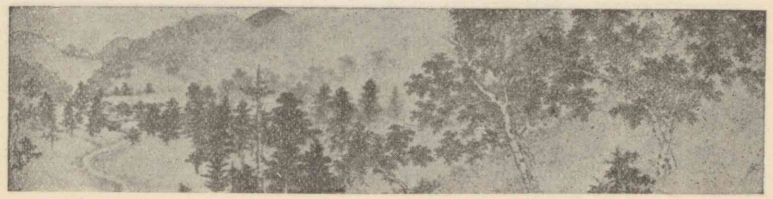
夫婦の姿を影繪のやうに眺めて、我知らずほゝゑんだこともある。

私たちはこの人たちの生活の友だちである。

夜はせゝらぎの音が、雨ではないかと疑はれるほど、寢覺の耳を驚かす。農夫は作物と同じ心になつて、田に畑に水を欲してやまないのだが、ここにはかくも水の音が豐かである。かういつて農夫に話すと、彼はたゞ笑ふであらう。なんとなれば、これくらゐな水では、とても農作物には足りないからである。閑人の耳の風流と、力と汗の實用とには、甚だしい隔りがあるのだ。「白石清泉、夢に入る頻りなり。」と賦して、佐久間象山は故郷を懷かしんでゐるが、信州の自然には、かういふ趣がある。田澤も小さ

草徑　草でおほはれた小道。

全山を領す　山全體を占領する。



信濃の山路（寺崎廣業筆）その五

いながら、これだけの景趣は具へてゐた。

私は一日子供等に誘はれて、溪川を上へ上へと遡つて行つた。草徑はいつか森の中に入つて、日光を遮つた。子供等が水に下りて行つた間、私はそこらの切株に腰をおろして涼を入れた。木の枝の間から湧いてくる冷々した山氣が、皮膚を刺すやうであつた。鶯が鳴く。鶯が鳴く。朗かな、轉ばすやうな鶯の聲が、全山を領して響く。都會生活に馴れた私が、一つの不思議を見出したやうに、聲の所在を探らうとして、眼を轉々とさせた樣子は、さぞをかしかつたことだらう。

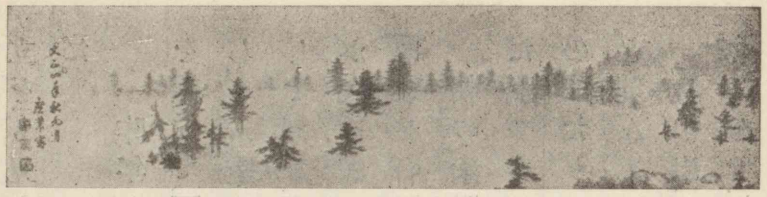
「水が濁つた。」

子供たちが不意に叫んだ。雜草を分けて、丸い石の上に下立つと、いかにも上から流れてくる水は、

〔Concrete.〕（混凝土）セメントと砂とに水を加へてねり合はせて作つた人造石。

平調　平凡なおもむき。

空濁　ひろびろとしてゐること。



信濃の山路（寺崎廣業筆）その六

染分けたやうに濁つてゐた。小さい淀みには、みづすましがくるくる舞つてゐた。

私たちは濁の原因を探しに、更に上つて行つた。二三の若者が砂利を採つてゐるのだ。こんな狹い溪川から砂利をすくふのか。その砂利をどうするのかと聞いたら、宿屋の建築に用ひるコンクリートを造るのだといつた。文明がかうして山奥に侵入するのである。

宿の樓上からの展望は平調で、しかもさまで空濁といふでもなかつたが、山村の趣は十分にあつた。私は寢ながら雲の姿を眺めた。印度洋で船の籐椅子に長くなつて見た以來の雲であつた。時にはまたあたりの連山をこめて、銀箭を注ぐやうな夕

立をも見た。夜は電燈を消して、疊の上をはふ月の光を懷かしんだ。

一昨年とかに開通したといふ一筋の白い街道が、山間の村落を縫うて、下り坂になつてゐる。いつしかそれがどこかで曲つてしまふ。空の彼方には、太郎山と呼ばれる山が、うつすらと線を劃してゐる。夕暮近くなると、山の色が變つてくる。そして、村落の影が底へ底へと沈んで行く。やがて青田の中から、地上の星のやうに家々の灯が生まれる。

朝の太陽は太郎山の右手から昇つた。或朝、私は欄干に出て、まだ眠つてゐるもやの深い蒼茫たる外景に對してゐると、俄にそのあたりが紅く染まつて來た。子供等はかねて日の出が見たいと望んでゐたから、

「日の出。日の出。」

と叫んで、起してやつた。彼等は一齊に蚊帳を飛出して、眠たい眼

をこすつた。二番目の女の子は、早速クレイヨン(一)を取出して、寫生にかゝつた。でき上つたものは、漫畫の太陽の如くであつたが、私がペンでかくよりも、その方が正直なものであつたらう。

私たちの家族は夕方になるのを待ちわびて、清水を汲みに行つた。一人は鐵瓶をさげ、誰かが末の子を負うたり抱いたりして、その街道を下つた。そこまでは可なりの道程があつたから、よい散歩になつた。ほかの浴客も浴衣がけで、愉快に語りながら、この清水汲を日課にした。

路端に一軒の水車小舍があつたが、そこを通りかゝると、末の子は「お國は恐い。」といつて、母の胸に顏を隱すのである。皆はおもしろがつて笑ふけれど、この子の身になつて見れば、いつか母の鄕里に連れて行かれて、水車は恐いものと敎へられた、その幼い記憶におびえてゐるのである。

いつか雨乞のあつた夜、私たちには不思議な土地の風習を見

(一) Crayon. 繪をかくに用ひる鉛筆のやうなもの。

道程 みちのり。

道すがら　道を歩いてゐながら。

(一)小縣郡上田市。田澤から四里。
(二)原田讓二著。大正十五年日本評論社發行。

たのも、この道すがらであつた。つい目前に聳えてゐる嶮しい山頂へ、いくつもの松明の火が、百足のはふやうに登つて行つた。暗い夜の山の火は、神秘の恐しさを感じさせた。

愈、歸らうとする朝、子供等は大事な土產物をどこかへ置忘れたといつて、大變な騷だつた。正直な宿の主人夫婦は、一緒になつて騷いで、とうとう探し出してくれた。それは山から採取した苔を罐詰の空に入れたものであつた。主人は名もない客の爲に、無價値な忘物の爲に、來年も、來々年もこんな騷をするだらうか。

田澤よ、さやうならの心持は、子も親も同一であつた。この朝は信州にも珍しいといふ深い霧雨が、高原をこめてゐた。自動車はその中を上田へ。顏はしつとりぬれる。子供等は頭から毛布をかぶつた。

—歐米新聞遍路—

三〇　空行く雁

(一)兄曾我十郎祐成の幼名。
(二)弟曾我五郎時致の幼名。
いざさせ給へ
(三)祐信。
(四)祐經。
(五)源頼朝。きりもの

頃は人皇第八十一代安德天皇の養和元年、あらたまの年立歸りて、(一)一萬は九つ、(二)箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。誠やらん、父の御事は佛になつてましますとや。その佛は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前いざさせ給へ。」といひければ、遙かに忘れたるさる方も今更思ひ出されて、消入るばかりなり。母泣く泣く宣ひけるは、「あの(三)曾我殿こそ己等が父にてあれ。」と心強く語られけれども、涙に咽せびて、陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前は、誠やらん狩場より歸り給ふ道にて、(四)工藤一藤とやらんに射られて死に給ひぬと、兄御前は語らせ給ふぞや。當時(五)鎌倉殿の切者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等がこの里にあるを知らでや過ぐらん。」など大人しく語れば、母より始めて女房

かりがね

人倫

たちまで、皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ、秋もたけ、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ連れたるかりがねの、南をさして飛行くを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ箱王殿。空に飛ぶ翼も別の翼ぞ。交へざりける。五つ連れたるは、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。ものいはぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生まれながら、わ殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬、鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうにものを射ありきなん。我々より幼きものも、馬、鞍、弓、矢を以てものを射ありくことの羨ましさよ。これ等のことども思ひ續くれば、いつもよりも今宵は父御前のこひしくおはしますぞや。」とて、袖に顔を差入れて、さめざめと泣きければ、弟も小賢しく顔を合はせて泣きぬたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさまし、人もこそ聞け。いかにわ上臈たち夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。とくとく入らせ給へ。」と恐しげにいひければ、二人のものは門外に逃出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内へ入りにけり。

遠侍

空行く雁（曾我物語挿繪）

その後は、二人のものどもわが身のほどを知りぬれば、世になき父を慕ひつゝ、語り合はするまではなけれども、たゞ目ばかりを見合はせて、互に袖をぞぬらしける。或時兄弟は竹の小弓、薄はぎの小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向かひ、あなたこ

年ばへ

なたに射通して、一萬、箱王に申しけるは、「我等もいつか成長して、わ殿は十三、我は十五にだにもならば、いかならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く差合ひ射取りて後には、ともかくもなりなん。わ殿も弓をよく射習ひ給へ。我も射習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。」といひければ、弟もうちうなづきけり。年ばへには恐しきことかなと人々思ひけり。

―異本曾我物語―

三一　陣屋問答　その一

森鷗外

將軍家の屋形。垂簾。簾の下には諸大名左右二列に坐す。中央前景に狩野介宗茂、新開荒二郎忠氏ゐる。

第一の大名　最早辰の刻になつてござる。犯人を預つた大見の小平太はどういたいたやら。（第二の大名に）固より曾我の殿ばらは、奸盗山賊の類でもござらぬに、笑止にも繩附になり申した。

辰の刻

推參

第二の大名　情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したとて、討つた工藤は父の仇ゆゑ、申し宥める途もござらう。御屋形の御座所近く推參いたいたと申すからは、罪科は所詮逃れますまい。

宿意

（雜色登場）

雜色　たゞ今これへ曾我の五郎を召連れてまゐりまする。

（雜色退場。五郎登場。大見小平太實政繩を取る。狩野座を進む。）

狩野　曾我の五郎承れ。たゞ今これへ召されたは某と新開とが承つて、夜討の宿意を尋ねるためぢや。さあ逐一に申し立てい。

落魄

五郎（怒る）　默れ、狩野の介。祖父伊東の次郎祐親が將軍家と不和のため、自滅に及んでこのかた、久しく落魄いたいてをるが、某とても遠祖左大臣藤原の武智麿が流を酌む由緒ある身分ぢや。申すほどのことはぢきに申さう。若しそれがかなはぬなら、何事も申すまい。

狩野　怪しかることぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開　それをかれこれ申すのは、犯人の身となつても、まだ君にたてつく所存か。

（賴朝の聲簾の內より）　いや待て狩野、新開。曾我の五郎が申す條尤もなれば、賴朝みづから聽いてつかはす。

（簾を半ば捲く。賴朝登場。舍人二人、近臣二人隨ふ。狩野退く。新開中央に殘る。）

五郎（新開に）　そこを退いてもらはう。これよりもの申すに、わ殿がそれにゐては、わ殿にものいふに似て快うない。

將軍　新開退いてつかはせ。

新開　はあ。

（新開退く）

將軍　見れば昨夜の雨にそこの土は濕つてをる。誰かある。曾我の五郎に敷革を取らせい。

卒　はあ。

（卒右手より敷革を持出で敷く。）

五郎（感激す）　この敷革を見るにつけ、十年の昔ぞしのばるゝ。

年ごろ六波羅に勤仕して、平相國親子の覺めでたく、名利の爲に訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行うた小賢しき敵工藤が、時勢の移り變るに乘じて、宇佐美殿によつて御目見を賜はり、伊東の莊を拜領し、なほそれにも飽足らいで、我々兄弟を殺さうと讒舌を揮うた爲、

兄一萬は十三歲、

この箱王は十の時、

由比が濱邊に伴なはれ、

引據ゑられし敷革は、

夢見ごこちに春を待つ
つぼみを摧く悲涙の座。
今は首尾好く父の仇、工藤を討つて怨をはらし、この世に思ひ置くことなければ、
最期を急ぐわが爲に、
この一枚の敷革は、
父に見えん彼の岸に、
渡す弘誓の舟いかだ。

弘誓の舟いかだ（筏）

有難く拜領いたす。（敷く）

將軍　殊勝な覺悟ぢや。然らば親ら尋ねるが、このたび工藤を討取つたのは、年ごろの企か、但しは俄の思立か。

五郎　それは申すまでもないこと。我等が父を討たれたは十七年の昔。兄は五歳、某は三歳、しかと意趣をも存ぜなんだが、兄が九つ某

もの心を辨ふ

衆寡敵せず

が七つになつて、もの心を辨へてからこのかたは、片時忘れぬ復讐でござる。

將軍　然らば伊豆にある工藤が、十年の久しい間、月に四五たび乃至十たびも鎌倉へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。

五郎　いかにもその往返には心を附け、足柄、箱根、大磯、小磯、由比、小坪のあたりにたゝずみ、兄弟つけ狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎に餘り、少き時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。

將軍　ふん、さもあらう。さて工藤は父の仇ゆゑ仔細ないが、多くの麾下の侍をば、何故妄りに傷つけた。

五郎　固より我等兄弟は、かゝる狼藉を企てたからは、刃向ふもののあらん限り、千萬騎をも切靡けうと存じたが、我等が名告る聲を聞いて、足の立ち所も知らず逃行くゆゑ、後日の爲に一太刀づつ、印を附けたまでござる。

東道の主人

將軍　して大藤内はなぜ討つた。

五郎　あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆゑ、切棄てはいたいたが、所領安堵を喜んで下國する途中、報謝の爲に引返したは、せめてもの心掛、今はなかなか不便に存ずる。

將軍　神妙な詞ぢや。ぢやがそれほど義理を辨へたそちが、すでに敵を討つた上、なぜ余が座所に踏みこんだ。

五郎　これは憚ある申條かは存ぜぬが、流人となられた將軍家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道の主人ではござらぬか。それが成行とは申しながら、三浦殿に預けられて自滅いたいた。また敵工藤は格外の御引立を蒙つた。これ等の遺恨なきにあらねば、一太刀おうらみ申した上で、自害いたす覺悟でござつた。

將軍　おうよう隱さずに申したぞ。このたびの企を前以て存じてをつた同志のもの、乃至手引のものがあらう。事の序にそれも申せ。

五郎　さやうなものは一人もござらぬ。

將軍　さはいへ、母にはうち明けたであらうな。

五郎　こは仰とも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死ににゆけと申す親のござらうか。

將軍　おう、一族否運に陷つたそちたちが申條としては、一々尤も至極に存ずる。仁田の四郎はをらぬか。

仁田の聲（上手背後にて）　はあ。四郎忠常たゞ今それへ。

（仁田首桶を持ち、登場）

三二　陣屋問答　その二

仁田　仰によつて曾我の十郎が首級、これに持參いたいてござる。

將軍　五郎、兄にあはせてつかはすぞ。いましめ解け。

（犬見、五郎の縄を解く。）

仁田　實驗の上申し請ひ、わ殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ對面いたされい。

（首桶を開く。）

五郎　懐かしや兄上。

不覺

（鍔）

消えなばともにと思ひしに、

不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。さるにても兄上、どうしてお討たれなされたか。よし仁田殿は猛くとも、時致だに居合はせたら。

仁田　いや、わ殿の助太刀までもない。十郎が鋭き太刀風に、某は切りまくられ、右の肘と小鬢とに、薄手をさへ負うたれど、十郎が運拙く、わが薙刀に拂はれて、又はぽつきとつば元から。

五郎　なに、兄上の太刀が折れたとか。なぜわが太刀を兄上には佩かせなんだか。

仁田　おう、その悔み道理至極ぢや。某とても一門の十郎ゆゑ、首討つ所存はなかつたが、引かうといつた某を、十郎みづから呼止めて、首をわが手に授けたのぢや。

五郎　さてはよしみある御身が手に、兄上好んで掛られたか。

（五郎歎く。犬房丸鞭を持ち走り出づ。）

犬房　父上の敵、思ひ知れ。

（五郎を鞭うつ。）

五郎　や、この小童は何者ぢや。

（五郎睨む。犬房たじろく。）

仁田　犬房丸、御前ぢやぞ。

五郎　なに、犬房丸が御身か。

彼も人の子、幼くて
親を討たれし悲みは、
いかでか我に異ならん。
果報の繩に引かれずば、
及を取りて立向かひ、
御身に討たれんわが身なり。
刑場の土になるわしぢや。せめてもの心やりに、さあその笞で打つてくれい。

犬房　父上を討つたお前は強い人ぢやと思うたに、優しいことをいうて下さる。それではどうも打たれませぬ。

五郎　おう、さうか。さあ、につくい小童。打たれるなら打つて見い。

犬房　なんの打たいで。おのれが。おのれが。

（連打す。）

將軍　もうよいよい。犬房それで堪忍いたせ。

犬房　はつ。（鞭を棄てて平伏す。）

將軍　五郎この上問ふべきこともないが、賴朝閫外の職を辱うして、勇士猛卒を惜しむこと何物にも譬へられぬ。どうぢや、志を翻して奉公いたしくれまいか。

五郎　それは存じも寄らぬこと。若し處刑を宥められて、行住心に任せるなら、某は犬房にこの素首を取らせ申さう。犬房が討たいでも、

近き惠にかへられぬ
遠き恨のまつはれば、

いつ謀叛人にならうも知れぬ。一緒に死なうと誓うた兄を、久しう待たせるも心苦しい。首はねられるを待つ外ござらぬ。（大見に）さあ、繩を打たれい。

大見　いや、某は五郎丸が掛けたまゝの御身の繩を、君命によつて預り、また君命によつてほどいたばかりぢや。御身に繩打つすべを知らぬ。

志奪ふべからず

將軍　待て。勇士を失ふは遺恨ながら、その志は奪ふべからず。五郎が繩は賴朝が、手づから打つてつかはさう。

拜領

五郎（居直る）　こは思ひも掛けぬ仰ぎや。今生の思出に、さあ御繩を拜領いたさう。

將軍（起つ）　わが打つ繩は不動の羂索、難伏のそちにはふさはしからう。いでいで。（階を降らんとす。幕）

——高瀬舟——

三三　健康な秋の大地

川路柳虹

秋の自然の特徴ともいふべきは、空氣の澄んで、冷徹な底に一切の色彩が鮮かに映ることである。いはゆる天高く馬肥ゆといふ言葉の通り、空は遙かな彼方の上にその碧をたゝへてゐる。

秋霖

しかし、この澄んだ天空、冷徹な空氣、晴れやかな色彩も、秋の季節と共に生まれるものではない。夏から秋への移り變りに起る颱風の一過し、燃えた焰をうち消すやうにして、「夏」の姿をかき亂す嵐が、いつか冷やかな空氣をもたらすと共に、濁つた水蒸氣の多い温かい空氣が一掃されて、冷たく晴れやかになつてくる。それからその嵐と共に起る雨——時にはすでに秋霖とも思はれるくらゐな長雨が、十月頃まで續くこともあるが、その雨によつて濁つた空氣は一層清められ、冷たい氣温と共に、自然の姿を更に澄んだ清いものにするやうである。

秋の詩趣には、要するに二つの要素があらう。即ちこの澄んだ聖者の瞳のやうな清高な秋、そして收獲の秋、果實の實のり稻の穗のたわゝな秋、競技の秋、散策の秋——それ等は快活で光明的な秋の

側面である。しかし、この反面は凋落の秋、すべてがやがては滅亡へと急ぐことを思はせる秋、たとひ木の葉の色づき果實の熟する輝かしさ樂しさはあつても、それは一瞬の光耀に過ぎないことをも感じさせる無情な秋、悲愁の秋である。古來わが國の文學に表れた秋の情趣は、どちらかといへば、皆この凋落死滅の悲哀をのみ悲しむ「秋」ばかりである。「こゝろなき身にもあはれは知られけり、しぎたつさはの秋の夕ぐれ。」(一)とか、「枯枝に烏のとまりけり秋の暮。」(二)とか、さういふ寂しい荒寥たる情趣のみである。實際遠い田舍の野道などで行暮れて、身の丈よりも伸びた野の草の蕭々と生えてゐる彼方に、薄れ行く落日の影などを眺めて、昔の旅人などは誰しも「あはれ」といふ感情をこの自然から直觀したに違ひない。しかし、それは今日鐵路の縱横に走り、村落や都市の所在に點在する現代の野からは、それほど思ひつめた「あはれ」ともいふべき情趣は見出せない。私た

(一)新古今和歌集にある西行法師の歌。
(二)芭蕉の句。

凋落

ちは寧ろ輝く木の葉の美を愛し、散策に渇いた喉を冷たい溪流で潤ほし、競技に疲れた體を野の草の上に横たへて、高い天空を仰ぐ愉快を感ずる方がよほど自然である。悲しむだけが「詩」を知ることではない。秋の色の美しさを畫家のやうに賞し、秋の野の快さを運動家の心のやうな寛濶さで味はふことが、現代の青年男女として眞個な秋の詩趣を知ることではあるまいか。私の「郊外秋景」といふ小詩を引いて、秋の野の姿をしのぶとしよう。殊に武藏野は「秋」によつて始めてその尊さが知れる。私たちの郊外の秋は、決して寂しく悲しいものではない。

電車から見る廣い地と蒼空。
都會がその折りかさなる屋根を
次第次第に低めて行き、
翼を休める小鳥のやうに、

まばらに地の上にうづくまる
小さい町はづれのあばら家。
それに連なつて展開する
碧の菜畑と、低い水立と、
そして、食鹽のやうに白い小徑が、
小高い丘のあたりに消えると、
そこには草ぶきの屋根にまじつて、
赤屋根の可憐な洋館が、ここにもかしこにも、
童話のなかの家のやうに見え隠れる。
秋は高く澄んで空につぐみを鳴かしめ、
都會へ通ふ荷車の響もさわやかに、
ゆき交ふ電車のなかで子供は
小旗を振つて「萬歳」を叫ぶ。

新しい木の香の匂ふ貸家が、
かはいい停車場の側にふえ、
不斷にとんかんとのみの音が、
あたりの靜かな空氣を動かす。
健康な大地は一齊に黄金に輝き、
熟した木の果は樹蔭に充ちて、
採る人の手を待つてゐる。
「野に出でよ。」といふ聲が、
自然のどこからか聞えてくる。
この恵まれた秋の郊外に、
友よ、すこやかな日光と空氣とを
思ふさま吸はうではないか。

自修文

三四　春の七草と秋の七草

正月七日に七種の粥を祝ふこと今もなほ行はる。元は支那の風俗より出で、この日に若菜を食へば、邪氣を除き病難を受けずといふ信仰より來れり。古より用ひ來りし菜の七種を春の七草といふ。(一)せり、なづな、御形、はこべら、佛の座、すゞな、すゞしろこれなり。せりは日常の食用品なれば、知らぬ人なかるべし。なづなは葉はたんぽゝの如く、春の初小さき白花を着け、後細かなる莢の實を結ぶ。その實三味線の撥に似たれば、俗にぺんぺん草といふ。御形は俗にいふ餅草なり。菊科に屬する草にて、春夏の交、黃花を着く。古名をはゝこ草といふ。はこべらは、またはこべともいひ、石竹科に屬する小草にて、庭の隅、路端などに自生す。莖は方形にして蔓をなし、葉は對生にして先尖り、白色十瓣の花、春の初にむらがり開く。佛の座は俗にたびらことといひ、地に叢生する狀、佛の蓮華

(一)「せりなづな御形はこべら佛の座、すゞなすゞしろこれぞ七くさ。」（增補題林集）

春夏の交　春と夏とのさかひめ頃。

蓮華座　佛像の座。

筆坡竹竹尾　草　秋

（薄）

（一）奈良時代の歌。萬葉集に見える。「秋の野云云」とはぎの花云々」とは、一首の歌で後のやうな體の歌を旋頭歌（せどうか）といふ。

いかでか區別あらん　どちらがよい、どうして區別ができようか。

秋草中の云々　萩といふ字は草冠に秋といふ字故いふ。

および　指のこと。

座に似たる故この名あり。葉は圓くして五六分許、長きへたあり。春の末長きたうを出して、五瓣の花を着く。すゞなはたうな、すゞしろは大根なり。

春の七草の食用に供せらるゝに反して、秋の七草は全く觀賞用なり。古き歌に、

秋の野に咲きたる花をおよび折り
かき數ふれば七くさの花

はぎの花尾花くず花なでしこの花
をみなへしまた藤袴朝がほの花

とあるを、書物に見えたる始とし、いづれも爽涼なる秋の季節に咲出でて、野の趣を添ふ。

白露をこぼさぬ萩の枝ぶりもたをやかなるに、その花の愛らしさは、白萩、紅萩いかでかその區別あらん。漢字の萩は全く別の草なるを、わが國にてはぎにあて用ひたるは、秋草中の最も喜ば

(一)「をみなへし」と見つゝ、ぞ行過ぐる、男山にしたてりと思へば。」（古今集、布留今道）
(二)「思ふこと今はなきかなでしこの、花さくばかりなりぬと思へば。」（後拾遺集、花山天皇）
たぐふ　くらべる。
(三)「秋風の吹きうら返す葛の葉の、恨みても猶恨めしきかな。」（古今集、平貞文）
秀句　いひかけた句。裏見と恨とをかけたのでいふ。
(四)歌人。建久二年（一八五一年）歿。年五十三。
(五)京都のこと。當時都は遷さ

れたるものなればなるべし。(一)をみなへしの女に譬へられ、(二)なでしこの子にたぐへられたる、皆可憐なる趣の多ければなり。藤袴も姿優しく、花も愛らし。(三)葛の葉の表青く裏白く、翻るさまのおもしろさは、恨みに秀句と用ひられて、種々の歌集に遺れり。尾花は薄の花にて、秋の野はこの草ありて一入のあはれさも添ふめり。朝顔には數説ありて一定せず、今いふ朝顔なりとの説もあれど、一説には桔梗の花なりともいへり。

三五　舊都の月

(四)後德大寺の左大將實定は、(五)舊都の月をこひわびて、(六)入道に暇を乞ひ、都へ上り給ひけり。元より心すき給へる人にて、憂世の旅の思出に、名所名所を訪ひ見てぞ上られける。千代にかはらぬ翠は(七)雀の松原、(八)みかげの松。雲居に曝す(九)布引は、わが朝第二の瀧とかや。(一〇)業平の中

れて攝津の福原にあつた。
(六)平清盛。
(七)攝津にあつた名所。武庫郡魚崎から深江邊の濱をいつたらしい。
(八)今の御影附近の松をいふ。
(九)武庫郡布引山にある。
(一〇)在原業平。右近衛中將。元慶四年（一五四〇年）歿。
(一)「はるゝ夜の星か河邊の螢かも、わが住む方のあまのたく火か。」（新古今集）
(二)攝津川邊郡猪名川の河口。
(三)攝津川邊郡稻野の舊名。今大字に昆陽とい ふのがある。
(四)「見わたせば山もと霞む水無瀬川、夕は秋となに思ひけむ」

将のかの瀧見ての歸るさに、(一)星か河邊の螢かと、浦路遙かにながめけん、いづこなるらんおぼつかな。(二)ゐなの湊の曙に、霧たちこむる(三)昆陽の松。かならず春にはあらねども、(四)山本霞む(五)水無瀬川、(六)男山に澄む月は石清水にや宿るらん。秋の山の紅葉の色、稻葉を渡る風の音、御身に浸みてぞ思しける。

さても都に入り給ひ、彼方此方を見給へば、空しき跡のみ多くして、たまたま殘る門の內、行きかふ人もなければ、淺茅が原、蓬がそまと荒れはてて、鳥の臥所となりにけり。八月半ばのことなれば、まだ宵ながら出づる月、主なき宿に獨り住み、をり知り顏に鳴く雁の、音さへつらくぞ聞し召す。大將はいとどあはれに堪へずして、大宮の御所に參り、かねて心知れるなにがし女房して、かくと申させ給ひければ、(七)宮斜ならず御悅ありて、「こなたへ。」と仰せけり。大將南庭をまはりて、彼方此方を見給ふにつけても、昔は百敷の大宮人にかしづ

べは秋となに思ひけん。（増鏡、後鳥羽天皇）

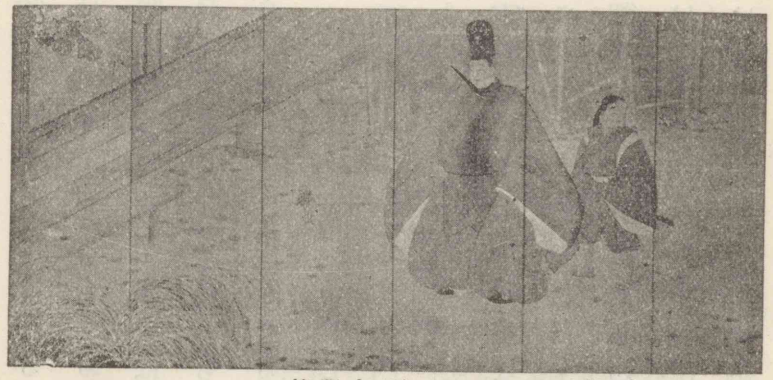
（五）攝津三島郡島本村。山崎驛の南を流れる小川。

（六）山城綴喜郡。山崎驛と淀川を挾んで相對する。山中にいふ石清水、山上に男山八幡宮がある。

蓬がそま（杣）鳥の臥所

（七）近衛天皇の皇后。

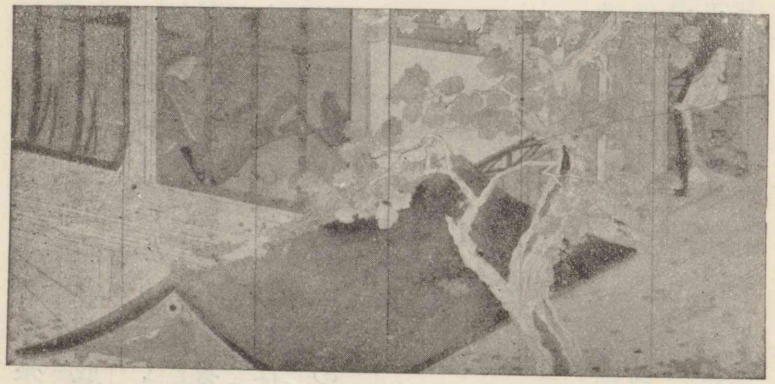
居待の月



舊都の月（乾南陽筆）その一

かれて、あかし暮し給ひしに、今は幽かなる御所の御有樣、軒につた茂り、庭に千草生ひかはす。こと問ふ人もなき宿に、荻吹く風も騷がしく、昔をこふる涙とや、露ぞ袂をぬらしける。時しあればと思しくて、蟲の怨もたえだえに、草のとざしも枯れにけり。大將あはれに心の澄みければ、庭上に立ちながら古き詩を詠じ、それより御前に參り給ひけり。八月十八日のことなり。宮は居待の月を待ちわびて、御簾半ば捲上げて、御琵琶をあそばしてわたらせ給ひけるが、山立出づる月影を、なほや遲しと思しけん、御琵琶をさしおかせ給

あたりを拂ふ



舊都の月（乾南陽筆）その二

ひつゝ御心を澄まさせ給ひけり。大將參り給ひければ、大宮は撥にて「それへ。」と仰せけり。その御有樣、あたりを拂ひて見え給ふ。互に昔今の御物語あり。大將は福原の都の住みうきこと語り申して泣かれければ、宮は平の京の荒行くことを仰せ出して、共に御涙に咽せばせ給ひけり。かくて夜もいたく更けければ、后宮は御琵琶をかき寄せさせ給ひて、秋風樂をひかせ給ふ。侍從は琴を彈きけり。大將は腰より笛を取出し、遙かにこれを吹き給ふ。その後故郷の荒行く悲しさを、今樣に作りて歌ひ給ふ。

古きみやこを來て見れば、
淺茅が原とぞ成りにける。
月のひかりはくまなくて、
あき風のみぞ身にはしむ。

と三遍歌ひ給ひければ、宮を始めまゐらせて、御所中に候ひ給ひける女房たち、をりからあはれに覺えて、皆袂をぞ絞りける。

――源平盛衰記――

改訂
女子新國文　卷五　終

大正十二年十二月十五日　訂正再版發行
大正十五年九月二十八日　訂正三版發行
昭和元年十二月二十五日　訂正四版印刷
昭和元年十二月二十七日　訂正四版發行

改訂　女子奥新國文　附

編者　芳賀矢一
發行者　合資會社　冨山房
代表者　坂本嘉治馬
印刷所　冨山房印刷部

定價
自至 一卷 一四卷　各金四拾貳錢
自至 五卷 五八卷　各金四拾錢
昭和四年度臨時定價
自至 一卷 一四卷　各金七拾錢
自至 五卷 五八卷　各金六拾六錢

浦野製

檢印
HAGA 檢 芳賀
著作權所有

發行所　合資會社　冨山房
東京市神田區通神保町九番地
電話九段一九二一・一九二二・一九二三番
振替口座東京五〇一番